
アフターキング

佐井 識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフターキング

【Nコード】

N5824S

【作者名】

佐井 識

【あらすじ】

東南アジアの小国・ヴェイラの首都で、隠遁者のような生活を送るヒゲの男、ジェイル（32）。その正体は、15年前にわずか17歳で退位した最後の国王だった。

正体を隠しながら静かに暮らす彼のもとへ、突然日本人の女子大生チセがやってくる。ジャーナリスト志望のチセは、ジェイルを取材したいと言ってきて!?

パワフルで天然なチセに振り回されながらも、ジェイルは諦めていた人生を取り戻していく。だが背後では、彼を政変に巻き込もうと

する不穏な動きが……。

破天荒女子×俺様ナイーブ男子（年の差）。恋愛ありクーデターありの、ドタバタエンターテインメントになる予定です。

第1話：最後の国王（1）

少年はひとりで立っていた。最高評議会が行われている大議場の中央で、並んだ多くの臣下に、さらにはテレビカメラの向こうにいる何百万もの国民の瞳にみつめられながら、ひとりで立っていた。

宮殿内にある大議場には、赤い絨毯が敷き詰められている。ヴェイラ王国の国鳥であるクジャクの金のレリーフがあちこちに施され、爛々と光を反射していた。贅を尽くした内装は、かつてヴェイラ王国が、アジアでも一、二を争う黄金採掘国だった頃の名残を感じさせる。欧米列強によるインドシナ侵略や第二次世界大戦の戦火を免れてきた宮殿は、長くヴェイラ王国の、そして国王一族のシンボルとして存在していた。ここで最高評議会を開けるのは、この国で国王ただひとりだ。

「神と王家と国民の名において」

少年が声を張り上げた。演説慣れしていない線の細い17歳の少年は、わずか1か月前に即位したばかりだった。山ほど肩章や星章などの飾りのついた白の礼服に、着られてしまっている。右腕を天に向かって伸ばそうとすると、袖の重さに一瞬よろけた。それでも必死に前を向いたまま、震える喉から慇懃に言葉を絞り出した。

「私、レックス2世は王位を辞し、王家の持つすべての権利を廃し、国民の皆さんに譲り渡すことを宣誓します」

怒号のような歓声が響き渡った。大議場の中だけでなく、宮殿の外に集まった大勢の国民たちが喜びの声を上げている。さらには、祝砲が鳴り響く音が、雲ひとつない青空に弾けていく。数秒前まで国王の臣下だった者たちが、立ち上がり、抱き合って歓喜している。その渦の中で、少年はひとりで立っていた。

ここで、ナレーションが覆いかぶさる。「以上、15年前の民主化決定の最高評議会の映像でした。こうして我が国は王制という古

い慣習を捨て去り、新たな民主化時代へと

「ジェイルはテレビのスイッチを切った。プチッと音を立てて画面が黒くなる。」

シャワーを浴びる前にテレビをつけっぱなしにしていたせいで、見たくないものを見てしまった。濡れた髪的先から、ぽたぽたと水滴がこぼれ落ちる。ジェイルは首にかけていた白いタオルを手に取ると、丁寧に頭を拭いた。

毎年、この時期は建国祭イベントが行われるのだ。ヴェイラが民主主義共和国として生まれ変わった8月末の建国記念日まで、国全体が祝祭ムードに包まれるのと同時に、王制時代のアーカイブが引っ張り出される。それらは、「民を長年圧迫した王政」「富と権力を欲しいままにした国王一族」などといった言葉と一緒に報じられる。夏の風物詩、一大イベントと言ってもいい。

うっかりしていた。5年前にイギリスの大学院を卒業し、ヴェイラの首都に移り住んでから、なるべく王制時代のものは目に入れないうようにしていたのに。特に、レックス2世の映像は。

テレビは消したはずなのに、残像が目の前で息をしているようだった。たった1か月しか在位しなかった、17歳の少年王。緊張して演説に臨んだつもりでも、緊張で声が裏返りかけていた。君主だというのに、雛鳥のように怯えているのが画面越しでもわかる。礼服を着ただけの子ども。なんて哀れで、なんてブザマな王様。

今日は朝からツイていない。ジェイルは薄い唇を結んだ不機嫌な顔で、テーブルの上の食パンの袋に手を伸ばした。トースターにセツトし、その間に湯を沸かして紅茶を淹れる。鍋の中ではゆで卵ができあがっている。沸騰してからきっかり10分、シャワーから出ると同時に火を消せば、好みの固ゆでになる。

Tシャツの上に麻のシャツを羽織ってテーブルに着いた。男の独り暮らしだから、家にいるときは、極端に言えばボクサーパンツ1枚でもゆるされる。が、ジェイルがそれを是としないのは、起きてすぐのジヨギングと夜の夕食以外、ほとんど家から出ない暮らしを

送っているからこそだ。生活の境目を曖昧にしていまいたくない。

軽く焦げ目のついたトーストが、いい匂いを漂わせている。紅茶からは湯気が立っている。殻を剥いたゆで卵の真ん中に、銀のナイフを差し込んだ。そのまますつと横に引くと、白と黄色の綺麗な断面図が現れた。いい感じだ。

右手に握られたナイフに、一瞬ジェイルの顔が映る。黒く艶のある髪は、ゆるやかに波打って、首の半分ほどまで伸びている。前髪も伸びきっていて、ほとんど後ろの髪と同化していた。口の周りには、やはりだらしなく伸びた不精髭。男は短髪が基本の熱帯気候のヴェイラでそんな風貌をしているのは、浮浪者か、ロックスター志望の若者か、もしくはチンピラくらいだ。

ジェイルはナイフを置いた手をトーストに伸ばした。新聞をめくりながら、無言で咀嚼していく。ナイフが陽の光を反射した。南東の空に昇った太陽は、強い日差しを降り注いでいる。アパートの外の表通りでは、通勤、通学の自転車や、朝市の商人たちの活気ある音が響いている。ヴェイラの夏の朝だった。

食器類を片付け、テーブルから朝食の痕跡がなくなると、仕事の時間が始まる。外国企業や海外のメディアを相手に、ヴェイラ語の書類やニュースを外国語に翻訳すること。もしくは、その逆。それが、ジェイルの唯一の仕事だった。といっても英語だけでなく、簡単なものであれば中国語、スペイン語、日本語でも請け負うので、全体的に言えば、それなりに仕事はあった。二間しかないアパートとはいえ、首都の中心部に家を借りていられるのはこのおかげだ。辞書をテーブルの左上に広げ、細かくチェックしながら、言葉を置き換えていく。奮発して購入したソニーのノートパソコンのキーボードが、軽快な音を立てる。集中すると時間はあっという間に経つ。集中力を切らしたくないので、昼食は摂らないことが多い。もしくは、冷蔵庫の果物やヨーグルトで済ませてしまう。

気づくと、すでに太陽は西の空まで移動している。17時を目途

に仕事を切り上げると自由時間だ。立ち上がって軽くストレッチをし、部屋で一番いい場所に置いてあるリクライニングチェアへ移動する。シックな焦げ茶の革貼りが自慢の一品だ。背もたれの角度を調節でき、平らにすれば簡易ベッドにもなる。中古家具屋の店頭で偶然みかけたものだが、美品だったうえにジェイルの体格にぴったりとフィットしていて、かなり気に入っていた。

映画のDVDをレンタルしている日は、このチェアに座って映画鑑賞。そうでなければ、翻訳仕事とは関係ない海外文学を読む。ジェイルにとって、1日のうちでもっとも至福のときだ。彼はゆっくりと、チェアに身を沈めた。

第2話：最後の国王（2）

19時半になると、夕食のために部屋を出る。屋台ではなく、小さくても店として構えている食堂を選ぶ。また、あえて近所の店ではなく、少し離れた場所の店へ行くのがジェイルのルールだった。歩きながら、夜の街の空気を吸いたいという理由がひとつ。もうひとつは、自分が、特定の店の常連客になるのを避けるためだ。

今夜は川沿いにある、赤い看板の食堂に行こうと決めた。美味しい海鮮ビーフンを出してくれる店だ。入り組んだ路地を歩き始める。

ヴェイラの首都の中央には、大きな川が流れている。別名・「聖女の恵み」。大昔、このあたりは干ばつがひどい土地だったが、ある日天から聖女が現れ、この地に川を通じたという。もちろん科学的には眉唾物の話だが、そんな伝説も相まって、街は川を中心に栄えている。川の東岸は新市街として、近代化が著しい。一方、川の西岸は、旧市街として昔ながらの街並みが広がる。ジェイルが住んでいるのも西岸だ。

このあたりは、かつての城下町でもある。川の上流は土地が少し高くなっていて、街を見下ろす形で、宮殿が座していた。今でも国会などが開かれているだけでなく、一部が観光名所として一般公開されている。毎日、バスが広い庭園に横付けされ、旗を持ったガイドのあとを、観光客がぞろぞろとついていくのだ。

くだらない、とジェイルは思った。ロープで区切られた通路を流れ作業のように歩かせて、外国人観光客をわかったような気にさせることに、大した意味があるとは思えなかった。国や宮殿の歴史を説明したところで、帰国すれば彼らはすぐ忘れてしまう。

だが貴重な外貨獲得のためには仕方がないのだろう。エネルギー採掘や外国企業の工場誘致も進んでいるとはいえ、タイヤベトナムといった近隣の国々には到底及ばない。観光業はヴェイラの重要な収入源だ。

路地を抜けると、露店が並ぶメインストリートに出る。この時間は特に、地元の間人や観光客でごった返している。東南アジアはどこも、夜になってからのほうが、人間が元気になるのだ。イギリスにもパブやクラブといった夜の盛り場はあるが、発せられるエネルギーの量が違う。子どもも老人も男も女も、我が物顔で夜の街を闊歩し、売ったり、買ったり、食べたり、喋ったりしている。

生ジュースの屋台の前にいた客引きの少年と目があつた。シャツの袖を引っ張られるのを察知して、思わずジェルは身体をねじる。指先につかまることなく、少年の横を大股で通り過ぎた。一瞬、少年の顔に不服そうな表情が浮かんだ。今は、失礼な態度だったかもしれない。後悔がジェルの心をよぎって、数歩行つたところでチラリと振り返る。だが、少年はもうジェルのことなど気にしておらず、笑顔に戻って呼び込みを再開していた。

5年暮らしても、なかなか慣れないものだ。

香辛料の匂いや呼び込みの声をかわしながら、ストリートを抜けた。お目当ての店まではあと5分ほどだ。

ふと、地図を持ってあたりを見回している少女が目に入った。シートボブで、小さな身体に不似合いな大きなリュックを背負っている。肌の色や身なりからすると、日本人観光客のようだ。

背が低く、幼い雰囲気少女だった。髪は明るい茶色に染めているようだから、まさか小学生ではないだろうが、日本ではローティーンのうちから髪を染めたりピアスを開けたりすると聞く。ツアーからはぐれた中学生だろうか。地図と風景を比較して、きよるきよると目を動かす様子は小動物に似ていた。親と合流できなくて困っているのかもしれない。

話しかけるべきか、わずかのあいだジェルは逡巡した。だが自分には関係ないと思いなおし、足早に過ぎ去る。不特定多数に注目されるようなことを、慎重に避けて暮らしているのだ。繁華街のど真ん中で日本語で人助けするなど、自殺行為に等しい。

海鮮ビーフンと生春巻き、氷入りのビールで夕食を済ませて、元来た道に戻る。先ほどの日本人の少女はすでにいなかった。ジェイルは内心ホツとする。やはり無闇に声をかけたりしなくてよかった。騒がしいストリートを離れ、アパートのある路地に入る。ツイてない日だと思つたが、つつがなく過ごすことができた。家に帰ってコーヒーでも淹れ、読書の続きをしよう。日付が変わる頃ベッドに入り、眠りに就く。いつも通りの1日だ。小さな達成感が、ジェイルの胸に広がる。

だが、最後の最後でそれはやってきた。

アパートの入口に人影をみつけて、ジェイルは足を止めた。蛍光灯に照らされた人物を見て、驚いた。玄関の段になっている部分にぺたんと腰かけているのは、さっき見かけた、日本人の少女ではないか。

少女がジェイルに気づく。ジェイルが何か言うより先に、少女が素早く立ち上がり、叫んだ。

「やーっと、みつけた!!!」

大きな瞳を輝かせて、嬉しそうにジェイルを指差す。人違いをしているのだろうか。思わずジェイルが身構えると、少女は我に返つたように、「あっ! ……ヤンナー!」と挨拶した。「ヤンナー」はヴェイラ語で「こんにちは」の意味だ。

「日本の方ですか?」

ジェイルはようやく口を開いた。

彼の口から出てきたのが流暢な日本語であつたことに、少女がビツクリした顔をする。

「すごい。日本語うまいですね」

「旅行者ですか? ツアーからはぐれましたか?」

「そういえば、ウィキペディアに数ヶ国語喋れるって書いてあつた!」

ジェイルの質問に答えていないどころか、何を言っているのかわからない。このガキはいったい何なんだ。

怪訝な顔をするジェイルの警戒を解くように、少女は笑いかけた。「私、オビサワ・チセといいます。あなたを探して日本から来ました。取材させてほしくて」

取材、という言葉にジェイルは身を固くした。嫌な予感がする。「人違いでしょう。さようなら」

無理やり会話を断ち切って、アパートの外階段を上がろうとする。しかし、少女の能天気な声が後ろから追いかけてくる。

「人違いじゃないですよー。確かに15年前の写真からだいぶ雰囲気変わってるけど、ヒゲがなかったらこの顔だもん」

思わずジェイルは振り返った。少女はいつの間にかiPhoneを取り出していて、画面の写真とジェイルを見比べていた。映っているのは、今朝テレビで目にしたばかりの。

ジェイルの瞳が見開かれる。少女はにっこりと笑った。

「あなたがレックス2世ね？ ジェイル・レックス・ハツサ・チュンクリット。最後の国王で、15年前に民主化を断行した張本人。私、あなたに会いに来たの」

第3話：ヒゲと少女

面倒なことになった。
ジェイルの脳内で警鐘が鳴り響く。だが、動揺を悟られてはならない。

「人違いです」

あくまで無表情を装い、きっぱりと答える。同じようなことは、これまで何度かあった。とにかく否定し続けて、相手に有無を言わさないのが肝要だ。しつこいようなら、多少威圧的になっても仕方ない。ヒゲ面の男が凄めば、さすがに相手も……。

「って、写真を撮るな！」

叫んだときには、既にiPhoneのフラッシュが焚かれたあとだった。チセが画面を覗き込んでしゃぐ。

「結構よく撮れてる」

「やめろ！ 何するんだ！」

「あ、でも髪の毛もうちよっと流したほうがいいかも？」

「おい……」

先ほどからまったく話の通じない相手に、ジェイルは疲労感すら覚え始めていた。

チセがふとiPhoneから顔をあげ、小首をかしげて笑った。

「丁寧語だけじゃなくて、話し言葉も上手ですねえ。その口調、平間准教授そっくり」

「ヒラマ……？」

ジェイルの顔色が変わる。背の低いチセに合わせ、ぐいっと腰をかがめて顔を近づけた。

「タカシ・ヒラマのことか？ トーキョー・ユニバシティの？」

ヒゲ面が急接近したことに頓着する様子もなく、チセは頷いた。

「そうです。私、平間ゼミの学生なんです。レックス2世さんのことも、准教授から聞いて」

思わずジェイルはチセの口を手でふさぐ。隙間からぐふつと空気の音が漏れた。

「その名前を言うな！」

そのときアパートの前の路地を、訝しげな目でジェイルとチセを見ながら親子が通り過ぎていった。ジェイルはハツとする。路地とはいえ、人通りはそれなりにある。ヒゲの男が少女の口をふさいでいる姿は、否応なしに目立つだろう。犯罪場面と勘違いされてもおかしくない。

「クソツ」

天を仰ぎ、英語で罵り言葉を吐いた。チセの口から手を離し、代わりに腕を掴んで引つ張るように外階段を上り始める。チセは怯えるどころか、大きな瞳をきよるきよるさせながら付いてきた。

だから、このガキは一体なんなんだ。

「そこにいろ」

チセを部屋に引つ張り込むと、テーブルの椅子を指差す。返事も確認しないまま、ジェイルは扉で仕切られた奥のベッドルームへと駆け込んだ。食事や仕事に使っているのはメインルームで、こちらはほぼ本棚と寝具だけの部屋だ。

棚から手帳を取り出して、大急ぎでめくる。TAKASHI HIRAMAの文字をみつけ、ベッドサイドに置いてある電話の受話器を掴み取った。81という日本の国番号に続けて、携帯電話の番号を入力する。

国際電話特有の発信音に飽きかけた頃、相手が出た。

「もしもし」

「Hello、タカシか？」

英語で切りだすと、ハツとした気配がした。

「ジェイ？ 久しぶりだな！ どうした？」

イギリスの大学院に通っていた時代、ルームメイトだったのが日本から来た平間高志だった。年齢はジェイルより8つ上だが、ざっ

くばらんとした性格と、アジア人同士という親近感もあって、気の置けない付き合いをしていた数少ない友人のひとりだった。

だからジェイルにしては珍しく、感情を露わにすることができるとどうしたもこうしたもねーよ。お前、ふざけんなよ。何なんだよあいつは！」

「へ？ なんのことだよ？」

タカシが間の抜けた声を出すので、ジェイルはさらに早口でまくしたてた。

「チセ・オビサワとかいう日本人の女の子のことだよ。いきなり俺の家に来て、『取材させてくれ』だよ。お前のゼミの学生とか言ってたぞ。俺の素性を教えたのか？」

「おま、早口でわかんねえよ……。え？ おひさわ ちせ 帯沢千星が、そっちにいるのか？」

4年間イギリスにいたにも関わらず、タカシは英語が下手だった。国際政治学の准教授ともあるうものがそれではないのかと思うが、日本で若手の研究者として頭角を現していることは、ジェイルも伝える聞いていた。

ジェイルは日本語に切り替える。少なくとも、タカシの英語よりジェイルの日本語のほうが数段、うまい。

「隣の部屋にいるよ。すげえ変なガキ。大体あの子、いくつだよ？ 10代だろう？ 日本の大学も飛び級制度を導入したのか？」

数秒の沈黙のあと、タカシは突然噴き出すと、いきなり爆笑した。「だははは！ あの子、ちっちゃえもんなあ。でも3年生だから今年で21歳だよ。リーガルな年齢。そうかあ、変わってる子だと思っただけ、マジでヴェイラまで押し掛けたかあ」

ジェイルの苛々に構うことなく、タカシはゲラゲラと笑い続けた。「笑いごとじゃねえよ。説明しろ」

「すまんすまん。確かにウチのゼミの学生だな。将来ジャーナリストになりたいとか言ってる、俺がお前とルームメイトだったって話をぼろっとしたら、すげえ食いついてきたんだよ。もともと比較政

治論とか体制移行に興味あつたみたいでさ」

「だからって、お前は俺の住所まで教えるのか？」

思わず、非難めいた口調で詰め寄る。

「いや、さすがに教えねーよ。……教えてないが、心当たりはある」

おそらく、と前置きして続けた。

「どうしてもって言うんで、お前から来たクリスマスカードを見せたことはあつた。その最中に電話がかかってきて数分席を外したから、写メでも撮られたかもしれん」

「泥棒じゃねえか」

オーマイゴツシユ、とため息が漏れる。

「なあタカシ、日本の学生は、頭は良くても道德ってものを知らないのか？」

「少なくとも、大学に道德を教える義務はねえよ。ゆとり世代は俺たちにも手に負えん」

「ユトリ……？」

聞き慣れない言葉をジェイルが聞き返すと、タカシがまたゲラゲラと笑つた。

「そういう教育制度があつてな。まあそんなわけなんで、夏休みを利用してお前に会いに行つたんだろ。しかし最近は、女の子のほうが行動力あるなあ」

「感心してる場合か。言つとくけど、俺は取材なんて一切答えるつもりないからな。昔のことはもう関係ないんだ。そのために俺は……」

……

ジェイルの言葉を紡ぐように、タカシが続けた。

「できるだけ一般人らしく生きてる、んだろ」

ジェイルは押し黙つた。大学院時代、はじめてタカシに過去を知られたときも、自分は同じことを言つた。

王制が崩れてすぐイギリスに渡り、ありふれたアジア系の学生として過ごしながらも、素性がばれることを常に警戒していた。当初はカメラのシャッター音や、東南アジア出身の人間とすれ違つこと

にすら、いちいち反応していた。

自意識過剰だという自覚はある。だが、おかげでなんとか15年間、平穩を保つてこれたのだ。

「わかつてるよ。帯沢さんのことは俺に気を遣う必要はない。お前の好きにすればいいさ」

タカシが笑いながら言った。自称「小岩出身のヤンキー」らしい彼は、実際高校を卒業しておらず、大検を取って大学に入ったらしい変わり種だ。そのせいか、研究者とは思えないくらい口が悪い。寮生活を数年間ともにした結果、ジェイルの日本語は、影響されてかなり砕けたものになってしまった。

「ところでジェイ、今も翻訳で生活してるのか？ 論文を書くつもりはないのか？」

タカシの声がさりげなく一段低くなったのを感じて、ジェイルは自嘲めいた笑い声を洩らす。

「大丈夫、間に合ってるよ。それよりお前が先月『フォーリン・アフェアーズ』に載せた論文読んだぜ。相変わらず英語は下手くそだが、考察はなかなかよかった」

うっせえよ、というあけすけな反応を聞いて、ジェイルは我知らず肩の力を抜いた。親友と呼んでいい関係のタカシにすら、突かれたくないこともある。きっとタカシは、わかつていてすぐ引いたに違いないのだが。

また連絡するよと言って、ふたりは国際電話を終えた。

第4話：フォークダンス

電話を終えて一拍置いてから、ジェイルはわざと乱暴にドアを開けた。

iPhoneを操作していたチセが顔をあげる。言われたとおり、素直に座っていたらしい。ジェイルを見上げて、チセは無邪気に笑った。やはり、21歳には見えない。椅子の上でちよこんと体操座りし、両手でiPhoneを持っている姿は、アライグマを彷彿とさせた。

「タカシと話がついた。帰ってくれ」

ぶつきらぼうに腕を組み、チセを見下ろす。全身で拒否の意思を表しているつもりだった。

チセはきよとんと小首をかしげた。

「私は私の意志でここに来ているので、平間准教授は関係ないです」
わからないガキだ。ジェイルは顔をしかめて腕を組み直す。

「じゃあ言い換えようか。タカシの教え子だろうとなかろうと、俺は、君とこれ以上話すつもりはない。取材を受けるつもりはない。以上だ」

強い口調で言い放った。だが、チセは表情を変えることなく、大きな瞳でじつとジェイルを見つめ返してきた。動物のような不思議な目だと、ジェイルは思った。考えていることが読めない。

「なんで？」

「え？」

思わず聞き返した。

「なんで取材したくないんですか？」

ふざけているのかと思っただが、チセは本気で訊いているらしくかった。疑問を口にすれば、親がなんでも教えてくれると思っっている子どものように。その無邪気さに、ジェイルは妙に腹が立った。

「プライバシーって知ってるか？俺は、プライベートなことを親

しくない人間に話すつもりはない。特に過去のことは」

拳を握りしめる。語気が荒くなる。

「俺はもう引退した身だ。一般人だ。喋る義務も責任もない。普通の人生を送るために努力してるんだよ。取材なんてもってのほかだ」
カメラに追い回され、新聞に書きたてられた日々を、ジェイルは忘れない。

メディアは大義名分をかざして、人の生活に入り込んでくる。父の訃報を受けて、当時の留学先であるスイスから戻ってきた17歳のジェイルを待ちかまえていたのは、無数のフラッシュだった。

“ 国難の時期に、のうのうと外国へ留学していた王子が、今更帰って来た ”

すでに国政は内紛続きで、王室の人気は急落し、民主化運動は止められないうねりとなっていた。王室はメディアをコントロールする力すら失いつつあった。彼らにとつて、ジェイルは恰好のネタだった。

「 だいたい、今更何が知りたいんだよ。もう全部終わったことだ。カネをもらって昔のことをべらべら喋るヤツらもいるが、俺は違う。昔の身分にすぎりついているような、薄っぺらいセレブリティ気取りたちとはな。俺は、社交も慈善事業も大っ嫌いなんだよ！ 」

あの頃、フォークダンスの真ん中に突然放り込まれたようだった。大勢がジェイルのまわりを輪になって取り囲み、一方的にすり寄ったり、写真を撮ったり、罵声を浴びせたりしながら、ぐるぐると回り続ける。ジェイルが円から出ることはできない。

民主化は自分ひとりで決めた、国王として最初で最後の仕事だった。王党派や軍部は撤回を求めて怒り狂ったが、もはや知ったことではなかった。どちらにしろ民主化は時間の問題だった。ならば、さっさと見切りをつけるべきだ。

権力がなくなれば、ただの人だと世間は言う。実際、王位を返上して民主政権が誕生してしまえば、フォークダンスに興じた人々は散り散りに去って行った。忘れられることに、むしろジェイルは安

堵した。だが、今でも拭えない疑問が、どこかにこびりついている。

でも、俺だけが、そんなに悪かったのか？

「ジャーナリスト志望だかなんだか知らないが、私生活に土足で入り込んでくるな。スクープを取れば満足か？ そっちは良くても、こっちはたまったもんじゃない。お前たちは表面だけすくいとって、わかったような気になりたいだけだよ。恵まれた日本の大学生のお遊びに、付き合っているヒマはない」

言い切って、ようやくジェイルは我に返った。

興奮のあまり、肩で息をしていた。言葉の熱気がこもる部屋に、南国の夜風がふわりと流れていく。

さすがに最後の部分は言いすぎたかもしれない、と気づく。だが、ここまで言わせたのはあいつだ。バツの悪さと開き直りが同居した思いで、ジェイルはチセの表情を窺った。

チセはほとんど体勢を変えないまま、ジェイルを見ていた。

怯えて動けないのか、と思ったその矢先。チセは満足気に口角をあげて 笑った。

「今日はこれが聞けただけで、じゅうぶん」

チセはびよんと、身軽そうに立ち上がった。山登りにでも行くような大きなリュックを平気で背負うと、啞然としているジェイルをよそに、すたすたと歩き始める。

「どうも、お邪魔しました」

あれだけ出ていってほしいと思っていたのに、なぜかジェイルは慌てた。玄関に向かうチセを追いかける。

「おい……いいのか？」

我ながら、おかしなことを言っているとジェイルは思う。

「ジャーナリストは根性がないと務まらないですから。1回で話聞けるなんて最初から思っていないですよ。取材相手に信用してもらおうところからはじめないとね」

チセが敬礼のポーズをした。小ぶりな口が卵型に開く。

「現場100回精神！」

「ゲンバヒヤツカ……って、また来るつもりか!？」

ジェイルの声が裏返った。

「あ、そうだ。このへんで、安いホテル知ってますか？」

「ホテル、予約していないのか!？」

「あなたのこと探してたら、ホテルまで取るヒマなかったんだもん」
しれつと答えるチセに、ジェイルは目眩を覚えた。

タカシと電話したり、チセと押し問答しているあいだに、時刻は23時を過ぎていた。ヴェイラはそう治安が悪い国ではないが、ここ数年は失業率の上昇で、犯罪が増加している地区もある。こんな時間に、年頃の日本人の少女が暗い路地を歩くのは……。

一応タカシの教え子でもあるのだ。取材の話は置いておくとして、犯罪に巻き込まれでもしたら、合わせる顔がない。

「カラオケとかネットカフェでもいいんだけど」

ある訳ねえだろ、と突っ込みたいのを必死にこらえて、ジェイルは壁に手をつき、ガクリとうなだれた。部屋を指差して、目も合わせずに呟く。

「今夜だけだ。絶対に今夜だけ。朝になったらすぐ出る」

俺は何をやっているのだろう。ジェイルは天を恨んだ。チセに会ってから、調子を狂わされっぱなしだ。だから、ガキは苦手だ。

「わあい。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいまーす」

チセがジェイルの脇を、軽やかな足取りで通り過ぎていく。初対面の外国人の男の家に泊まることに、もう少し遠慮や抵抗があってもいいのではないだろうか。これが“ユトリ世代”というやつなのだろうか？

チセの明るい声が響く。

「あ、充電したいんで、コンセント借りてもいいですかあ？」

第5話：走る男

「眠れねえ……」

明るくなつた空を眺めながら、ジェイルは今日だけで数十回は言つたであろうセリフを、また呟いた。

ごろりと身体の向きを変えると、寝台が軋んだ。リクライニングチェアの背もたれを倒して、ベッドとして使っている。昼寝にはちよどいいが、一晩眠るとなると少し固い。枕の位置を数センチずらしてみても、しっくりこない。

隣の部屋の使い慣れたセミダブルベッドは、別の人間に占領されている。帯沢千星という名の、とびきり変な日本人に。いや、チセは床で寝ると言い張つたが、それはジェイルが納得しなかった。

あくまで親切心からではないと、再び寝返りを打ちながら、ジェイルは自分に言い聞かせる。彼女の言動を思えば、確かに床に転がしたって構わないと思う。あえてベッドを譲つたのは、パソコンや貴重品のあるメインルームを使わせなくなつたというのもあるが、親しくない客人ほど丁寧に扱うほうがラクだからだ。そのほうが後腐れがないし、貸しを作つておいたほうが後々の交渉で有利になる。どうせ一晩だけの我慢だ。

「ヴェイラは小国がゆえ、力技ではない外交が求められるのです」
そう言つたのは、王室付きの家庭教師だつたらうか。

ぼんやりと思ひだしかけて、やめた。昨日から過去のことばかり考えすぎている。

顔に腕を乗せて、朝の光をシャットアウトした。そのまま30分ほどまどろんだところで、音を最小に設定しておいた目覚まし時計が鳴る。7時半。まだ寝ていたいところだが、ジェイルは身体を起こした。こんなときこそ、いつも通りのサイクルで活動すべきだ。

隣の部屋の物音に耳を澄ます。チセはまだ起きていないようだった。家の主人は寝られなかったというのに、なんと図太いがキだろ

う。呆れていいのか感心していいのかわからないまま、ジェイルはそつと家を出た。

アデイダスのスニーカーが小石を蹴る。息を吸って走り出した。太腿の筋肉が引き締まるのを感じる。ゆるやかに速度を上げて、ペースを掴んでいく。通り過ぎる人や車の輪郭がぼやけ、そのうち、街のざわめきがふっと遠くなる。自分の吐く息の音だけが生々しくなる。そうなればもう、意識しなくても、手足は勝手に動き続けている。

朝のジョギングは5年間、ほぼ欠かしたことがない。ペースを保って走っているときの、世界から切り離されるような、この感覚が好きだからだと思う。目覚め始めた街をすり抜けるように、ジェイルは走って行く。

眩しい光が、右斜め前から差ししてくる。朝は神聖だ。イギリスからヴェイラに戻って以来、そう思うようになった。ヴェイラとイギリスは似ていない国だが、特に空はまったく違った。10年ぶりに帰国したとき、曇り空が普通のイギリスに比べて、ヴェイラの抜けるような青い空に目がくらんだものだ。最初は慣れなかったが、今はこの眩しさがいいと思う。あれこれ考える余地を奪い、走ることに専念することができる。

ルートは特に決めていない。蹴り出したときの感覚で、気が向くままに走る。川を渡って新市街まで足を伸ばすこともあるし、旧市街の迷路のような町並みをぐるぐる回ることもある。首都といってもそう大きな街ではないから、1時間あれば、たいていのエリアには足を伸ばすことができる。今日は、寺院や墓地が並ぶ静かな道を選んだ。道の脇にプルメリアの木々が高く生い茂っている。くつきりした緑色の葉のなかに、無数の可憐な白い花びら。花びらの中央は、黄色い絵の具をスポイトで垂らしたように色づいている。

行商の老婆と行き違った。ヒゲの男が軽快に走る様子を、彼女は物珍しそうに見た。祖母と同じほどの年齢だろうか。間違っても、ジ

エイルの正体には気づかないだろう。そう考えて、口の端があがった。ジョギングが好きならもう一つの理由。街中でも顔を隠す必要がない。走っているとき、俺は自由だ。

アパートの前まで戻り、息を整える。昨晚チセのせいで見そびれていた郵便受けを確認すると、イギリスから転送された手紙が一通届いていた。

タカシなどのごく親しい者を除いて、ジェイルは今住んでいる住所を教えていない。実の母と姉妹にさえも。対外的にはまだイギリスにしていることにしている。大学院で研究を続ける友人に頼んで、手紙の類は転送してもらっていた。

差出人と内容はわかっていて。この数か月で3通目だ。手で破って中身を確認すると、やはり思ったとおりだった。一瞥しただけで封筒に戻すと、掌のなかで丸めた。

帰ってきてても、まだ家は静かだった。届いたばかりの手紙をゴミ箱に捨てる。

今のうちにシャワーを浴びることにする。その前にキッチンに立ち、鍋に水を張った。無意識のうちに冷蔵庫から卵を2個取り出して、鍋に移そうとしたところで、ふと立ち止まる。

「……」

左手の卵を額に当てて、数秒停止した。

「招かれざる客、だろう」

片方の卵をケースに戻した。そこまでもてなしてやる必要はない。チセが起きたらすぐに叩き出さなければ。

シャワーを浴び終わってまずするのは、ガスの火を止めること。10分以上茹でると、卵が固くなりすぎる。濡れた身体をざっと拭き、とりあえずズボンだけ履いて、部屋を大股で横切った。ジェイルがガスの栓を回したのと、玄関のドアが開いて、チセが現れたのは同時だった。

「ただいま」。あ、もうお風呂出ちゃってる」

奥のベッドルームにいるとばかり思っていたチセが真反対の方向から現れたことに、ジェイルは取り乱した。

「部屋にいたんじゃないかったのか」

寝癖なのか、チセは前髪が少しハネていたが、すでに普段着に着替えていた。両手にビニール袋を持っている。

「シャワー浴びてる隙に、ちよつとそこまで」

普段なら自分を見上げるチセの視線が、なぜか胸のあたりにある。そこでやっと、上半身裸だったことにハッと気づいた。

「あ、あっち向いてる！」

チセに背を向けてしゃがみこみ、慌てて手にしていたTシャツをかぶる。髪がまだ濡れているので気持ち悪いが、それどころではない。

「別に気にしないのに」

呑気な声がかから降ってきた。お前じゃない、俺が気にするんだよ！と心の中で叫ぶ。日本の道德観念は大丈夫なのだろうか？ 少なくともヴェイラの未婚の女は、成人男性の裸をまじまじとみつめることなどしない。

「露出してない部分、思ったより肌が白いですねえ。日本人みたい」

トボけたふりして、細かいところをよく見ている奴だ。そんなチセの指摘を無視して、後ろ髪の水滴を振り払い、何事もなかったかのように立ち上がった。

「どこに行ってた」

チセがビニール袋をあげてみせる。ナンプラーの香りが漂った。泊めてもらったお礼に、朝ごはんをと思って。表の屋台で麺買ってきました。さっぱり系と辛い系両方あるので、好きなほう選んで

……」

「いらない」

ジェイルは低い声で遮った。チセがきよんとする。

「麺じゃなくて、揚げパンのほうがいいですか？」

チセのほうを見ずに、ヤカンを火にかけた。食パンをトースターに入れ、食器棚から皿を取り出す。

「朝食は決まっている。それは自分で食べ」

チセがテーブルに荷物を置いた。ジエイルの表情を覗き込んでいる気配がする。

「それって、ポリシー的なものですか？」

タオルで髪を拭きながら、聞こえないふりをした。ヤカンがうるさく鳴って、沸騰を知らせる。紅茶のポットに湯を注ぎながら、誰に聞かせるでもなく、ぼつりと自国語でつぶやいた。

「……屋台のものは食べない」

屋台のものは食べない。

トーストが、チン！と間抜けな音を立てて飛びだした。

第6話：スコールの後で

ずるずるずる、と麺をすすする音が部屋に響く。ジェイルは翻訳を打ちこむ手を止め、うんざりした表情でパソコンの向こう側の少女を見た。

「……気が散る」

唇と麺を垂直に交差させた状態で、チセが目だけを動かした。

「ふあつて、めんふあ〜」

「飲みこんでから言え」

つややかな米麺が、つるるっ！と威勢よく飲みこまれた。

「だって、麺を食べてて音が出るのはしょうがないじゃないですかあ。そもそも、自分で食べるって言ったのそっちだし」

悪びれないチセの目線を払うように、ジェイルは手元のペットボトルに口をつけた。

確かに、2人前の屋台麺を自分で食べると言ったのはジェイルだ。だがトツピングを大量に追加した大盛りを買ってきたとは聞いていない。

「一気に食べられないから、片方は朝ごはんにして、もう片方は昼ごはんにします！」

勝手にチセに宣言され、嫌がると「食べ物を粗末にしているんですか？」と詰められた。反論できずに放っておいたら、向き合ってトーストと汁麺の朝食を取るといふ奇妙な状況になった。その後、仕事を始めたジェイルをほったらかして、散歩に出たり部屋の文献を読んだり、チセに好き勝手されているうちに、すでに時刻は昼である。

「お腹空かないんですか？ 半分こします？」

「断わる」

「美味しいのにー。米の麺って、冷めても美味しいですねえ。ライムの味が効いたそうめんって感じ。刻みネギ乗っけてもいいかも」

つつけんどんに扱っているのに、チセはまったく気にする様子がない。いつ取材の話を持ち出してくるのかと思っていたが、その気配もない。

いちいち反応する自分がバカらしくなって、ジェイルはパソコンの画面に視線を戻す。今日手掛けている翻訳は、アメリカの企業に送る、ヴェイラの政治経済情勢に関するレポートだった。

“ヴェイラ国民党のドルーダ首相が、政権運営の危機に瀕している”
淡々とキーを打つ。

“昨年、経済政策の失敗の責任を追及されて退陣した前首相に代わって、新たに首相となったばかりだが、増税案を打ち出したことに野党が反発している。首相の親戚が汚職に関与していたという疑いが報じられたこともあり、野党は追及していく見込み。国民党側は徹底抗戦の構えだが、支持率が低下を続ければ、議会の解散もあり得る。そうなればこの5年間で4回目の解散となり、政治的混乱は避けられない。”

格差の拡大や債務問題など、問題は山積みだというのに、政治家たちは政局に終始している。ヴェイラはASEANの次期議長国になることが決まっている。民主化してから一番の国際的大役になるだけに、どの政党も自分たちの手柄にしたがっているのだ。

憂慮すべき事態だと思う。だが怒りを感じるよりも、どこか他人事のように感じてしまっていた。

“これを受け、陸軍のロチャ元将軍がヴェイラ国民党を訪問。遺憾の意を表明した。”

ロチャ元将軍が、まだしゃしゃり出てくるのか。ジェイルは心の中で舌打ちする。彼は軍部の大物で、民主化に最後まで反対したひとりだ。民主化後も、軍部・右派を中心に一定の影響力を持ち続けている。もう80歳を過ぎているだろうに、元気なジジイだ。

「なーんか、ASEAN利権に目がくらんでるって感じですねえ」
いつの間にかチセが後ろに立って、画面を覗き込んでいた。ジェイルは思わず振り返る。

「国内の問題から目をそらすために、外交に力を入れるってのは、政治の常套手段ではありませんけど」

ジェイルの肩越しに画面を見ながら、チセが腕組みをする。

「……ヴェイラにとって、次のASEANはどのような意義を持つと思う？」

「2013年に中国の国家主席が交代になりますよね。その重要なタイミングに、議長国として対中国の姿勢を打ち出すことができれば、2015年のASEAN共同体発足に際して大きな発言力を得ることができるのかなあ、と」

さらりと答えたチセに、ジェイルは内心驚いていた。ヴェイラを取り巻く国際情勢をよく理解している。しかも、ビジネス用の英訳を正確に読んでいる。一応、タカシのゼミで学んでいるだけのことはあるらしい。

「あ、ここ、スペル間違ってます。aじゃなくてeですよ」

ジェイルの胸の内を知らず、チセは無邪気に画面を指差した。

「……今、直そうと思ってたんだ。あっち行ってる」

「はい」

チセは素直にリクライニングチェアのほうへ歩いて行った。チセに指摘されたのが恥ずかしくて、猛スピードで誤字を直した。キリのいいところまでまとめ、上書き保存をクリックする。横目でチセの姿を探した。

チセはリクライニングチェアの端に座り、窓からの景色を眺めていた。クーラーをかけているのに、勝手に窓を少し開けている。隙間から入ってくる風を、目を細めて受けていた。カーテンがふわりと揺れた。

時が止まったように穏やかな午後だった。ジェイルの胸に、はるか昔の記憶がよみがえる。王宮にいた頃、午後の勉強が終わったあとにテラスのある部屋でおやつを食べるのが日課だった。白い前掛けをつけたメイドたちがサーブしてくれる、南国の鮮やかなフルーツや焼き菓子に、砂糖を入れたジャスミンティー。姉と妹のおし

やべりを横で聞いているうちに、いつの間にか眠くなるのがよくあった。20年以上前、10歳にも満たぬ頃の話だ。

あんな日々もあったのだ、自分にも。

窓の外で派手なクラクションが鳴り、我に返る。表の車道の音が追想を掻き消した。

「 食い終わったなら、荷物をまとめて、出る」

「 ちえ」

チセはジエイルを見上げて、いたずらが見つかったような笑顔を見せた。そんな顔をされたら、子ども時代の思い出の続きにいるような気がしてしまう。

「 じゃ、また来ます」

「 来るな」

「 また来ます」

掴みどころのない笑顔を残して、チセは去って行った。

チセが去ると、部屋は急に静まり返った。

キーを叩く音が、やけに大きく響いた。翻訳の仕事を再開するも、なぜか今ひとつ捗らない。あまり寝ていないせいだ、とジエイルは諦め、いつもよりはやく仕事じまいした。きちんとリセットして、明日から元通りの生活を送ったほうがいい。

リクライニングチェアに深く座って、窓の外を眺めた。日は少し傾き始めている。あっという間に眠気が襲ってきて、ジエイルは瞼を閉じた。

本当に、変な奴だった。

子どもみたいな外見で、何も考えていないような言動を繰り返しながら、いきなり核心を突いてくる。そのくせ、真意が掴めない。

精神が内に引っ張られていくように、眠りに落ちていく。

遠く、雨が降り始める音が聞こえた。スコールだ。亜熱帯気候に属するヴェイラの雨季では、スコールは日常茶飯事である。窓を閉めなければとぼんやりした頭で思うが、身体は動かない。

雨が激しく地面を打つ音を聞きながら、ジェイルはリクライニン
グチェアに沈んでいた。

夢うつつの瞼の裏に、さまざまな記憶が溢れては引いていく。幼
少期のこと、少年時代のこと、イギリス留学中のこと。

ああ、そうか。

こんなに思い出すのは、久しぶりに誰かと喋ったからだ。この5
年間、生きるのに最低限の会話しかしていなかった。思い出を思い
出すきっかけすらなかった。

流れていく記憶は倍速のDVDのようだったが、目まぐるしさは
なく、心地よかった。懐かしい、という久方ぶりの感情を抱きなが
ら、ジェイルは眠りに身体を委ねた。

激しく扉を叩く音で目が覚めた。

ジェイルは寝ぼけ眼で、あたりを見回す。いつの間にかスコール
は止み、すっかり夕暮れになっていた。

もう一度、ドンドンドンという音が玄関から聞こえた。郵便だろ
うか。そういえばドアブザーの調子が悪かったから、ドアを直接叩
いているのかもしれない。それにしても乱暴だなと思いつつながら、慌
てて口の端の涎をぬぐい、立ち上がった。

ガチャリとドアを開けて、ジェイルは目を見開いた。

びしょ濡れのチセが、水を滴らせながら立っていた。

「観光中に、スコールがきて……」

白いカットソーが水気を含んで、ぴったりと肌にくっついていて。
中に着た水色のタンクトップの線を浮き上がらせている。

「雨合羽を出そうと思ってリュックに気を取られてる間に、貴重品
を入れてたポーチを盗まれたんです」

餅のような肌は、濡れたせいかますます白くなっている。

「その中にパスポートが入っていて。追っかけたんですけど……」

「もしかして、まだ、ホテルにチェックインしてなかったとか言わ
ないよな？」

一縷の望みをかけて問いかけたが、悪い予感の通り、チセはこくと頷いた。

パスポートなしでは、外国人はまともなホテルに泊まることはできない。大使館に申請しようにも、今日は土曜だから、はやくても再発行の手続きは月曜になるだろう。

ジェイルは長いため息をついた。こうなるような気が、どこかでしていた。諦めろ、と神様に言われているようだ。

「まあ、とにかく入れ。風邪ひくぞ」

チセを招き入れながら、ジェイルはなぜか笑えてきていた。

第7話：ねじまき少女

「建国祭イベント中の土日は、広場に花市がずらーって並んで、すっごい綺麗なんですよねー」

よく晴れた日曜の午前にはさわしく、ふんふんと鼻歌をうたいながら、チセがガイドブックのページをめくっている。

「夜はランタンで街中がライトアップされるんですよ。闇の中に浮かぶランタンってめちゃくちゃロマンチック。前、『世界ふしぎ発見』で放送されてたんですよ！ほかに、伝統芸能のダンスが見られたりとか、屋台もいっぱい出るんですよ」

チセがガイドブックを、ぐいとジェイルの目の前に突き出した。

「だから行きましようよう、お祭り」

「イ・ヤ・だ」

八工を除けるように、ジェイルは露骨に眉をひそめて手で振り払う。しかしチセは意に介さず、楽しそうにのぞきこんできた。

「せっかくヴェイラに来たんだから、行かないや損じゃないですか」

「じゃあ、ひとりで行け！」

「お祭りは大勢で行くほうが楽しいものですよ。それに、土曜まで引きこもっているとメタボになっちゃいますよー」

起きてから、ずっとこの繰り返しだ。迫るチセと、阻むジェイル。頑として首を縦に振るつもりはないが、持久戦に持ち込まれるのは避けたほうが賢明なことはわかってる。

「休みの使い方は自分で決める。祭でもどこでも勝手に行って来い」
「わっ、このアイス屋さん美味しそう。ミントマンゴー味ってどんな感じですかね？しかも割引券ついてる〜」

ガイドブックの写真を指差すチセに、ジェイルは言い返す気力も失う。

パスポートを盗まれたチセを、やむを得ず家にあげたのが昨日の夕方。週が明ければ大使館で再発行の手続きができる。不毛なやり取

りも、この土日だけの辛抱だと思えば……。

ピンポンパン、と間抜けな音が部屋に響いた。チセのiPhoneが振動しながら鳴っている。着信音までふざけた女だ。

「あ、もしもし?」

ジェイルがいるのも気にせず、その場でチセは喋り始めた。この際に本を持って奥のベッドルームに閉じこもってしまおうかと思っただが、部屋にはチセの荷物があるので無駄だと思いなおし、とりあえずパソコンのキーボードを指でいじる。

「うん。うん。だからあ……それは大丈夫」

パソコンの画面を見ているにも、チセの電話がなんとなく気になっってしまう。「ギリシャでゼネスト」というGoogleニュースを見ているジェイルの耳を、チセの聲がかすめていく。相手は、どうやら男の声のようだ。彼氏か? と想像しかけて、いやいやと心の中で首を振った。つまらないことを考えるのはよそう。

「わかった。じゃあ、ちよつと待って」

チセはそう言ったかと思うと、いきなりジェイルのほうを振り返った。

「すみません、代わってもらえますか」

「え、おい!？」

「適当に喋ってもらえれば大丈夫なので」
投げるようにiPhoneを手渡され、つい両手で受け取ってしまっ

てのひらの機械のディスプレイには、「通話中」の文字が光っている。抗議しようとしてチセを見ると、すでにガイドブックを持って窓際に移動していた。

仕方なくiPhoneを耳にあてると、弱弱しい男性の聲が飛び込んできた。

「ハ、ハロー……?」

今どき珍しいほどのカタコトの発音だった。もう一度繰り返される。

「もしもし……ハロー？」

「日本語、喋れます」

ジェルが口を開くと、回線の向こうで息を呑んだ音が聞こえた。「ああ、よかった。お世話になっております。あの子、いきなりいなくなっただと思ったら、事後報告で『ヴェイラにいる』なんてメールしてきて。いつもそうなんですよ。たいがいのことでは驚かなくなりましたけど、心臓に悪くて。我が娘ながら、何を考えているのやらさっぱり」

「娘!？」

思わず聞き返した。

「失礼、申し遅れました。帯沢と申します。千星の父でございます。ええと、ジェルさん……でよろしかったでしょうか。大学の先生の研究仲間と伺っておりますが、ゼミの研修旅行で、しばらくお世話になっていると先ほど聞きました。もう本当に、何も言わずに出かけて行ったものですから。そちらでもご迷惑をかけていないといのですが」

「いえ、まあ……」

何も言われていないのは、ジェルも同じだ。チセのほうを見るが、こちらの会話など聞こえないように、鼻歌を歌いながらガイドブックをめくっている。嘘の口裏を合わせることもなく、平気で実の親と会話させるなんて。ゼミの研修旅行だと？ まったく、実にふざけた女だ。

「娘さんはいつも、こう、積極的な……性格で？」

嫌味っぽく聞こえないように気をつけながらも、チセへの最大限のあてつけのつもりで、ジェルは懸命に日本語を発音した。

「まったく、突飛な行動をする娘でして。ご迷惑をおかけしていませんか？」

人の好きそうな父親は、恐縮したように言った。

「母親がいないせいか、やんちゃに育ってしまいました」

「え？」

ジェイルは素で聞き返していた。

「父ひとり子ひとりなのに、仕事が忙しくて構ってやれなくて。ひとりでもやっってしまう子だったので、私も甘えていた部分があるんですけどね」

父親はしみじみと語るが、ジェイルはこの会話がチセに聞こえなかが気になって仕方なかった。手で受話口を覆って、声をひそめる。

「失礼ですが、奥様は」

「あの子が6歳のとき、病気で亡くなりました。子宮がんで、手の施しようのないところまで進行していたんです。妻は我慢強い性格だったので、ギリギリまで痛みを訴えなかったのが仇になりました。気づいたときには、もうどうにもならなくて……」

こめかみから一筋の汗が流れるのを感じた。密かにチセを見やる。が、こちらの会話に気づいた様子もなく、部屋の隅でくつろいでいる。

ひとしきり話したあと、すみません話しすぎましたと、父親は謝った。

「日本語が達人な方でよかった。最初聞いたときは驚きましたが……。どうぞ、娘をよろしく願います」

「え？ あ、はい。もちろん」

ぼうつとしていたせいで、勢いで返事をしていた。後悔したときはすでに遅く、電話は切れていた。

「電話、終わりました？」

対角線の向こう側にいるチセが顔を上げた。

「お父さん、変なこと言ってますでしたか？　すごい心配性なんですよ」

「ひとり娘だつて……。そりゃ、心配もするだろう」

呑気な笑みを浮かべているチセに、ジェイルは言った。

「大事にしるよ」

きょとんとしたのち、「へへっ」と、チセは照れた。

iPhoneを机に置いて、ジェイルはしばらくパソコンの画面を眺めた。それから水を飲み、再びパソコンを操作しようとしたが、たまっている仕事は特になかった。

チセは黙って本を読んでいる。ジェイルの本棚から勝手に取り出したらしい、パオロ・バチガルピの『ねじまき少女』。近未来の夕イを舞台にしたSF作品である。タイトルは、主人公が会う日本人少女型アンドロイドのことだ。

ジェイルの沈黙は10分ともたなかった。

「外、出るか」

チセがきよとんとした顔で見上げる。

「祭。行きたいんだろ」

情が移ったとか、気が変わったとか、そういうんじゃない。ジェイルは自分に言い聞かせる。ただ、余計な情報を聞かされて、部屋にこもっているのが鬱陶しくなっただけだ。

チセの笑顔を見る前に、ジェイルは大股で玄関へ向かった。

第8話：迷子

夏のバカンスシーズン、それも建国祭イベント中だけあって、街は観光客で盛大にこったがえしている。民主化して15年目という節目の年であることも、盛り上がりには拍車をかけているようだ。

あらゆる壁や街灯が、色とりどりの花とランタンで飾りつけられている。赤、青、黄、ピンク、オレンジ、紫……。原色の南国の花は、むせかえるように濃厚な匂いを放っている。ストリートには串焼き、麺類、餅、フルーツ、かき氷などの食べ物屋台や、伝統工芸の玩具、Tシャツやサンダル、アジアのアイドルグッズなどの屋台が切れ目なく並び、千手観音のようにほうぼうから客引きの手が伸びている。

そのあいだを縫うように、ジェイルは速足で歩く。

チセを連れてやって来たはいいが、これほどの人出だとは。屋台に興味がなく、花やランタンを愛でる趣味もないジェイルは、すでに来たことを後悔し始めている。

「メインストリートはもういいだろ。はやく、建物の中にも」
横を見ると、チセがいない。ジェイルと真反対に、屋台や出しものに興味津々なチセは、さっきからちよくちよく姿を消しては戻ってきていた。またかとジェイルは心の中で舌打ちして、人ごみに目を凝らした。

「こつちです」

シャツの裾を引っ張られる。振り返ると、怒りの表情の木彫りのお面が目の前にあった。

「わっ」

「へへ、驚きましたー？」

お面の向こう側から、チセのしてやったり顔が覗く。ジェイルはげんなりした。

「遊ぶな。どうしたんだそれ」

「魔除けの効力があるって聞いて。お土産に買いましたー」

木彫りの面は、ヴェイラの伝統的な民芸品のひとつである。だが、若い娘のお土産に向いているとはとても見えない。それをつけたり外したりしてきゃっきゃと楽しんでいるチセは、かなり変わっていると思う。

「あつ、あの屋台かわいい」

チセが指差した。麦わら帽をかぶった主人が番をする屋台には、サイコロ状にカットされたフルーツが串に刺さって、ずらりと並んでいる。違う色のフルーツを組み合わせて、目に鮮やかだ。

声をかける間もなく、チセは屋台に走って行く。付き合うのもバカバカしく、ジェイルはさっさと歩き始めた。

なんで、あんなに楽しそうなんだあいつは。

人の波をかき分けてずんずん歩きながら、ジェイルは思った。祭なんて、ただ暑くてうるさいだけではないか。冷房のきいた部屋で本でも読んでいたほうが、よほど快適だと思う。祭の楽しみ方などジェイルは知らない。

前方から、やんちゃそうな少年たちが広がって歩いてきた。混雑しているのに迷惑な奴らだとジェイルは思う。案の定、すれ違いざまに、端のひとりと肩がぶつかった。

「いてっ」

少年が大きな声をあげて振り返った。他の少年たちも顔を向ける。

しかし、無言で振り返ったジェイルを直視するやいなや、彼らは「やべ」という表情を浮かべ、足早に去って行った。

「なんだよ……」

近頃の若者が失礼なのは万国共通なのだろうか。そう思うジェイルに、からかうようなチセの声が飛んでくる。

「今の子たち、超怖がってましたね！」

いつの間にかまた傍に戻って来ていたチセは、右手にフルーツ串、左手にタピオカジュースを握っていた。見るたびに違うものを持っている娘だ。

「ぶつかってきたのはあつちだ」

「だって、カタギには見えないですよ、その格好」

赤い柄シャツにチノパンツ、長い髪に不精髭。そして、変装用のサングラス。

「失礼な。俺は善良な市民だ」

「うそだ」。テキ屋の兄さんですよ」

テキ屋が何を差すのかわからなかったが、どうせロクな意味ではないだろうとジェイルは思った。帰ったらグーグルで検索をかけなければ。

広場に出ると、地図やガイドブックを手にした一団が、そろそろとバスに乗り込んでいくのが見えた。服装を見る限り、おそらく地方から首都にやって来たツアーだろう。冷房が壊れたようなバスに詰め込まれて、彼らは田舎から首都にやってくる。世間は夏休みだ。「俺は店でコーヒーでも飲んでるから、あとは勝手に」

またチセがない。

わざわざ探すのも面倒なので、座って待つことにする。ジェイルは近くの屋台でペットボトルの水を買うと、木陰のベンチに腰掛けた。

ペットボトルで額を冷やす。冷たい水滴が肌の上を流れて気持ちがいい。

そのまま、しばらくそうしていた。家族連れ、カップル、自転車、外国人観光客。たくさんの人たちが、ジェイルの前を通り過ぎて行く。皆、夏らしい表情を浮かべている。

「平和だな」

ジェイルは独り言ちた。

政治がどうか、経済がどうか、国としての問題は山積みだが、街の人たちはそれらからずっと離れたところで暮らしている。彼らにとっては、目の前にあることのほうが余程大切なのだろう。それはある意味で、健全な国の在り方だとジェイルは思う。

強い風が吹いて、サングラス越しに世界が揺れる。

目の端にチセの姿が映った。ジェイルは深く沈めていた身体を起す。

チセは、また右手に何かを持っている。いや、引っ張っているといたほうが正しいか。土産物として持ち運ぶには、大きすぎるよ
うな。

「どうしたんだよそれは!？」

思わずジェイルは悲鳴をあげた。

チセが連れてきたもの、それは泣いている幼い男の子だった。

「……名前は？」

男の子はぐずぐずと涙をすすってばかりで、ジェイルの質問に答えようとしない。

「どこから来た？ 親は？ 年は？」

怒られているように感じたのか、男の子がワツと泣きだす。しゃがんだチセが、すかさず「だいじょうぶだよー」と頭をなでた。縮こまるように、男の子はチセにしがみついた。

「もー、そんな喋り方じゃ尋問ですよ。逃げた舎弟を追い詰めるヤクザじゃないんだから、もっとやさしく聞いてあげてください」

「いきなり迷子のガキを連れて来られたって、どうしていいかわかんねえよ」

チセがみつけたときには、男の子はストリートの隅でひとりで泣いていたらしい。周りにいた人を見回しても、皆知らないという顔をした。チセが声をかけると抱きついてきたので、一緒に親を探しながらここまで連れてきたのだという。

「迷子センターとかありますか？ 日本ではよくあるんですけど」

「少なくともこの周辺にはねえな。デパートならともかく」

子どもと同じ目線の高さから、チセがジェイルを見上げる。

「じゃ、警察？」

「ダメだ!!!」

ジェイルは即答した。ただでさえこの風貌なのだ。サングラスを

かけたまま警察に行くのは厳しい。というより、職務質問されてもおかしくない。名前や素顔を見られるのは絶対に避けたい。

「それか、俺は近くで待ってるから、お前が連れて行け」

「私、ヴェイラ語喋れないのにな？」

この案も却下だ。見ようによっては、チセも迷子だと思われかねない。パスポートがないことがばれると、面倒が起きる可能性もある。

「どーすんだよ……」

かといって、置き去りにしていくのはさすがに気が引ける。ジェイルはため息をついた。

縮こまったままの男の子をやさしくなでながら、チセが笑顔で訊いた。

「いっぱい泣いておなिकासいたよね。何か食べる？ 何が好き？」

当然、日本語が通じるわけではないのだが、男の子はチセの目をじつとのぞきこんだ。チセは口の前で何かをつまんだ手の形をつくり、大きく顎を動かして「ハポー（美味しい）！」と言ってみせた。

どうやら、食べるジェスチャーをしているらしい。

「チャナム」

男の子がぼつりとつぶやいたのを、ジェイルは聞き逃さなかった。チャナムとは、南部地方の伝統的なお菓子の名前だ。

ジェイルは男の子のそばにしゃがみ込んで、サングラスを外して尋ねた。

「グナン？ ミコツク？ フーエン？」

ヴェイラ南部の都市名を思いつくままに挙げる。フーエンと言ったとき、男の子がうなずいた。

「お父さんやお母さんと、一緒に旅行に来たんだな？」

「うん」

知っている単語が出てきたことに安心したのか、一気に反応がよくなった。ジェイルの問いに、素直に答える。

「バスでか？」

「うん」

「色は何色だった？」

「あおとしろ」

ジェイルは思い出した。さっき見たバスは、まさに青と白の車体だった。あのバスに親が乗っていたのなら、出発してからまだそれほど時間は経っていない。速攻で追いかければ、間に合うかもしれない。

「次の行き先がわかるか？」

男の子は返事をするかわりに、ジェイルの向こう側を指差した。

その先にあるものを見て、チセがつぶやく。

「あ、宮殿」

自分自身から血の気が引く音を、ジェイルは聞いた。

第9話：王の間

「嫌だ！ 行きたくない！ やっぱりダメだ！」

後部座席でわめくヒゲの男を、タクシーの運転手は怪訝な顔でバツクミラー越しに見やる。

「往生際悪いですよ。ミン君のためじゃないですか。ほら、もうすぐ宮殿に着きますよ」

チセがケラケラと笑った。ミンという名の男の子は、そんなやり取りをきよとんと見つめている。

ミンを保護した広場から宮殿までは、タクシーで15分ほどの距離だ。

「俺にとつては、世界で一番行きたくない場所なんだよ！ わざわざ素性がバレる場所に飛びこむなんて、自殺行為だ」

「自意識過剰ですつてば。観光客にまぎれちゃえばわかりませんよ。3人でいれば、家族連れに見えるかも……ほら？」

チセが真ん中に座っているミンを抱き寄せ、頬の横でピースサインを作った。

ジェイルは壮大にため息をつく。どう考えても、誘拐犯と子ども2人にしか見えない。

「とにかく、一刻も早く親を探して、みつけたらすぐ退散だ」

「え、せつかくだから観光しましょうよ」

「バカ！ 何が楽しくて……」

言いかけて、ジェイルは口をつぐんだ。続く「わざわざ金を払って、元自宅を観光するんだ」という行為の虚しさは、きっと他人にはわからない。

タクシーの窓の外に視線を動かす。すでに宮殿の敷地内に入っており、青々とした自然が広がっていた。その奥に、日光を受けてきらきら光る建物が見える。白と金を基調とした、アジアと西洋の建築技術が折衷した荘厳な宮殿。19世紀初頭に第3代国王・レック

ス1世によつて建造され、ヴェイラ王国の栄華を内外に示した。でもまさか、同じ名前の子孫に面子をつぶされることになるのかな。

ジェイルは唇をそつと皮肉な形にゆがめた。

代金を投げるようにしてチケツトカウンターを通過する。早速、前庭にいくつかの団体客をみつけた。

「違うか？」

ひとつずつ確かめるが、どれもミンは首を横に振った。

「じゃあ次！」

早歩きで観光客たちを追い越し、宮殿本体の入り口に辿りつく。獅子の像に挟まれた大きな扉をくぐった。

「わー、すごい」

チセが感嘆の声をもらした。目の前に、磨きあげられた大理石の床が明るく輝いていた。壁には東南アジアに伝わる神話の絵が何枚も飾られている。

「わざわざ見るような場所じゃねえよ」

ゆっくり見たがつているチセをジェイルは急かす。

「ただの廊下だ」

のろのろと固まって歩く観光客のあいだを縫って歩く。リタイアした夫婦らしき欧米人カップルが、パンフレットを覗きながら「次は何？」と英語で喋っていた。ジェイルは口に出さずに答えた。次は、“エメラルドの間”だ。

角を曲がると、文字通りエメラルド色の装飾が壁に埋め込まれた空間が現れる。

「えー、これ本当にエメラルドなんですか！？」

興奮したチセが聞いた。

「んな訳ないだろ。使われているのは翡翠だ。北西部の山間部で昔はよく採れたらしいから」

「翡翠だって貴重じゃないですか。こんなに使うって贅沢ですねえ」

世界的に見ても、翡翠の産地は限られている。この部屋は、かつては王に謁見する客が待つために使われていたという。諸外国への権勢のアピールを狙っていたのだろう。

「宮殿なんてどこもそんなもんだろ。ミン、親はいたか？」

チセと一緒に翡翠に目を奪われていたミンは、慌てて周りを見回す。そして、小さく首を横に振った。それを合図にジェイルはまた大股で歩き出した。さっさと次にいかなければ時間がもつたいない。「あつ……ミン君、大丈夫？」

チセの声にジェイルが振り返ると、ミンが膝を抱えてうずくまっていた。段差につまずいて転んだらしい。

「いたい」

またベソをかいてしまった。チセがミンの横にしゃがみながら訴える。

「ミン君、追いかけてようとして転んじゃったんですよ。子どもだから、そんなにはやく歩いちゃだめです」

「んなこと言われても……」

反論しかけたジェイルだが、周囲の視線に気づいてハツとする。泣いている子どもとヒゲ面の男の組み合わせは、観光客としては不自然すぎる。あまり怪しまれるとマズい。

「俺が悪かった。頼むから泣くな」

ミンはこくりと頷いた。あまり喋らない子だから、確かに無理をさせていたのかもしれない。

「おんぶしてあげたらいいんじゃないですか？ 早く歩けるし、ミン君も親を探しやすいし、一石二鳥ですよ」

「おんぶ!？」

チセの提案に目を剥きそうになるが、ぐっとこらえてしゃがんだ。チセに促されて、背中にミンがよじ登る。慣れない重みと温もりを感じて、ジェイルは落ちつかない気持ちになる。なにしろ、生まれてこのかた32年間、誰かをおぶるなんて経験したことがない。

「よし、行くぞ」

ミンの涙が首筋に触れた感触がしたが、それは気にしないことにした。

矢印の観光ルートに添って、さまざまな部屋を通り過ぎる。その際、子どもに分かるような平易な言葉で解説してやると、ミンは喜んだ。

「ここは護衛たちの控えの間。宮殿はずっと守ってなきゃいけないだろ。時間が来ると交代するんだ」

「敵が来たらたたかうの？」

「宮殿の奥まで敵が攻めてきたことはないらしいけどな。でも王様の命を狙う奴はいっぱいいたから、気は抜けない」

チセは興味深そうに内装や展示を眺めながら、ふたりのあとをついてきている。まだミンの親はみつからない。

いよいよ、“王の間”の前に辿りついた。宮殿見学のクライマックス、宮殿内随一の広さと豪華さを誇る広間だ。ミンを背負う腕に力がこもった。

正直なところ、気が重い。

この広間が王制時代に公に使われたのは、父である先王の葬儀と翌日のジェイルの即位式が最後だったはずだ。ジェイルの最悪の思いの出のひとつだった。

父の死因は急性心筋梗塞だった。高血圧の気があったとはいえ、50歳になる前に死なれるなど、幼いジェイルは想像もしていなかった。今思えば政治のストレスなどもあったのだろうが、その頃はただひたすら、「何故」という気持ちが渦巻いた。

心の準備があれば、まだ違ったのかもしれない。だが王太子とはいえ、13歳からヨーロッパの寄宿学校に留学し、正月と夏季休暇にしか母国に戻らない生活を送っていたジェイルにとって、突然課せられた重苦しい儀式の数々は現実感のないものだった。

帰国するなり、疲労と緊張でほとんど眠れないなか、訳も分からないまま公務をこなした。思い出すたび吐き気がする。あの日、広

間にずらりと並んだ、人人人。全員がジェイルを見ていた。憐れみ、憂慮、もしくは値踏みするような目で。

「だいじょうぶですか？」

唐突にチセの声が耳に入って、現実を引き戻される。声のほうを見ると、チセは大きな目でじっとジェイルを見上げていた。

「いきなりばーっとしてどうしたんですか？」

「え？ いや……」

ジェイルが返答に詰まっていると、チセが思いついたように言った。

「あ、血糖値が下がったとか。そういえばお昼ごはん食べてないんじゃないですか？ 屋台の食べ物美味しかったのに、頑なに食べないようとしなないし」

ジェイルが反応する前に、チセはミンに話しかける。

「屋台の食べ物、ハポー（美味しい）だよー」

日本語に混じった「美味しい」というヴェイラ語を聞きとれたのが嬉しいのか、ミンが楽しそうに「はぽー！」と繰り返した。

「なのに、おじさんは頑固だよー」

「お、おじさん！？」

舌を出して逃げるチセを、思わず追いかけた。背中の上では、ミンもきやつきゃと笑っている。

「ほらミン君、ここが王様の部屋だつて。凄いねー！」

いつの間にか“王の間”に入っていたらしい。それに気づいて、一瞬、周囲のざわめきが消えたように感じた。ジェイルは目の前をに広がる光景を見渡した。そして、サングラスをそつとずらして、裸眼でもう一度見回す。

あの日と同じく、大勢の人間がいた。だが、ジェイルを見ている人間は誰もいない。みんな、赤いビロードが張られた王座や、色とりどりの石が埋め込まれたシャンデリアや、黄金のクジャクのレリーフなどに目を奪われ、ため息をついている。ジェイルを見ている人間は誰もいない。

「秘密の小部屋とか隠されてそんな雰囲気ですねえ！」

無邪気に彼を見上げる、この少女以外は。

チセの言葉に、ジェイルはあることを思い出した。サングラスをかけ直して小声でミンにささやく。

「ミン、いいこと教えてやる。他の人には内緒だぞ」

ジェイルは王座の奥を指差した。

「あのクジャクのレリーフの中に、一匹だけ動くやつがいる。そいつをずらすと、秘密の抜け道が現れる。上の階の、王の執務室に繋がってるんだ」

嘘のような話だが、幼い頃妹と一緒に試したことがある。探険は成功したものの、狭くて暗いうえに埃っぽくて、夜に小児ぜんそくの発作が出た。それがきっかけで父親にばれて、ひどく怒られたのだ。

何故ずつと忘れていたのだろう。俺は、ここに住んでいたのに。

ミンが目を輝かせて「ほんと!？」と興奮した。ジェイルは人差し指を口にあて、「しーっ」というポーズを作った。

「なになに、何の話ですか？」

「お前には教えねえよ」

にべもなく即答すると、チセは「ずるーい」と口をとがらせる。

「国家機密だ」

サングラスの奥の瞳を細めて、ジェイルは笑った。

第10話：デモ隊

ミンの家族を含むツアーは、観光コースの出口近くでみつかった。「お祖父ちゃんたちのグループにいたんじゃないの!? ここまでどうやって来たの!？」

目を丸くしながら、ミンの母親は幼い息子を抱き上げる。

「ひげのおじさんと、おねえちゃん」

ミンが今しがたふたりに送り出されたほうを指差した。だが柱の裏に隠れているジェイルとチセの姿が見えなかったらしく、母親は不思議そうな顔をする。その様子を、チセが陰からこっそりのぞく。「行っちゃいますよ」

「俺はいいって」

「すっかり懐いてたじゃないですか」

ジェイルがしぶしぶ顔を出すと、母親の腕に抱かれたミンがふたりに気づいて笑顔になり、小さい手を懸命に振った。その姿も人ごみにまぎれ、だんだんと見えなくなる。

「任務完了、ですね」

建物の出口を出ると、2階ほどの高さの広いテラスになっている。高い位置から街を見渡すことができるので、観光客が写真を撮ったり、双眼鏡で眺めるには絶好のスポットだ。

「人助けすると、気分がいいですねえ」

チセが背中を手すりに預けて、猫のように伸びをする。ジェイルは手すりの上で頬杖をつき、ぼやいた。

「みつかったからよかったものの……、あんまり余計なことに首を突っ込むなよ」

「それ、よく言われます」

チセはくりりと身体の向きを変え、眼下の景色を眺めた。

「『帯沢千星は素っ頓狂なことばかりする』って、21年間ずっと言われてますねえ。特に学校の先生からすると問題児だったみた

いで、裏では“小型爆弾”って呼ばれてたらしいです。おかげでお父さんもしょっちゅう呼び出されてたし」

ジェイルの眉間にしわが寄る。

「ドラッグとかやってたのか？」

「まさか！」

チセは嘔き出した。

「これでもミツシヨン系のお嬢様校でしたし、法に触れるようなこととは全然。臨海学校の自由時間で無人島探索したりとか、選挙管理委員として生徒会長選挙をイベント化したりとか、そういうのです」「イベント？」

「堅苦しい選挙じゃつまらないなと思って、ダンス部や調理部に協力してもらって、パーティーみたいにしたんです。楽しかったあ。反対されるのがわかってたので、基本的に先生へは事後報告でしたけどね。でも、悪いことしてるつもりはありません。生徒の評判も上々で、次の年から定例化されたんですよ。あ、中学生のとき、露出狂に遭ったのをとっ捕まえて警察に突き出したときは、『頼むから危ないことはしないでくれ』って、お父さんに泣かれちゃいましたけど」

けらけらと笑うチセの話の話を聞きながら、ジェイルは空を見上げてため息をついた。右往左往している大人たちの姿が容易に目に浮かぶ。電話越しでしか知らないチセの父親に同情したくなった。

だが次に聞こえたのは、予想外の言葉だった。

「私、いつも、明日死ぬんじゃないかって思って生きてるんですよ」

思わずジェイルは動きを止めた。

「形あるものはいつかなくなるし、時間は流れて、現在はあつという間に過去になっていく。当たり前のことなんてない。だから、私は目の前のことを見過ごしたくないんです」

チセの大きな瞳には、空と街の境目が映っていた。手すりにちょこんと寄りかかって夢みるように微笑む姿は、無防備な少女にしか見えない。しかし、その唇から紡がれるのは淡々とした言葉だった。

「今日会った人と、もう二度と会えないかもしれない。明日、死ぬのは私かもしれない」

それは、自分の母親のことを指しているのだろうか。

“あの子が6歳のとき、病気で亡くなりました”

今朝方の、チセの父親の言葉が脳裏をよぎる。ジェイルの微妙な表情の変化に気づいたのか、チセはジェイルを見上げた。

「お父さんに聞きました？ 母のこと」

「いや……」

なんと答えていいかわからないジェイルに、チセは目配せする。

「気にしないでください。ふふ、あの人すぐその話するんですよ。」

周りから『あの子が変なのは、母親がいなかった』ってよく言われたから、責任を感じてるみたいなんです」

でも、とつぶやく。

「確かに、因果関係はあるでしょうね。だけど母がいないのは私の人生でもう当然のことだし、それで同情されたり変な目で見られたりするの、腑に落ちなくて」

チセは静かに口角をあげた。

「生まれてくる環境は、誰にも選べないじゃないですか」

そんなことは知っている。それを繰り返し考え続けたのは、ほかならぬ自分だ。なのに、チセの言葉に予想以上に驚いている自分に、ジェイルは驚いていた。

サングラスの奥で瞳が乾く。まばたきすると、チセと目が合った。出会った夜にも感じたが、見る者をすつと引きこむような眼差しは、まるで動物のようだ。

そう思ったとき、チセがくしゃりと表情を崩した。

「だから自分で選べるものは、後悔しないようにしたいです」

そして、無邪気な笑顔を浮かべた。

ああ、この少女はきつと、ジェイル以外の誰にでも、同じように接するのだろう。相手の年齢も性別も出自も関係なく、高慢になることも、へつらうこともなく、ごく自然に、身軽に、まっすぐ目を

見て。

ジェイルは我知らず口に出していた。

「……変わってる」

「それも、よく言われます」

抜けるような青空の下、チセの明るい色の髪が、陽光に透けていた。

数日前まで見ず知らずだった外国人の少女と、15年ぶりにかつての我が家にいる。信じられないようできて、同時に当たり前のような、不思議な心地がジェイルを満たした。

シュプレヒコールが聞こえてきたのは、そのときだった。

「ドルーダ首相は辞任せよ！」

「ヴェイラの誇りを取り戻せ！」

観光地におよそふさわしくない騒ぎに、テラスにいる観光客たちが顔を見合わせた。シュプレヒコールはだんだんと大きくなっていく。ジェイルは手すりから身を乗り出して下を覗いた。

プラカードや横断幕を持った人々が列をなして、宮殿前の広場を練り歩いてきていた。

「デモですね」

「見りゃわかる」

ジェイルは素早く目を動かす。ざっと見たところで数百人はいるだろうか。30〜50代くらいの男性が多いが、女性もいる。広場まではチケットなしで誰でも入れるので、デモ隊は宮殿のギリギリのところまで近づいてきていた。出入りする観光客が遠巻きにしてあげた道を、デモ隊が練り歩く姿は異様だ。

彼らが掲げるプラカードには「無能なドルーダ首相は退陣せよ」

「ヴェイラを守れ」といった言葉が踊っている。

「人望なき政権は去れ！」

「「そっだー！」」

広場から宮殿に向かって、デモ隊は拳を振り上げて叫ぶ。

宮殿の上階には、行政府が据えられている。それに向かって彼らは叫んでいるのだろうが、まるでテラスに立つ自分に向けられているような錯覚に陥って、ジェイルは手すりを握りしめた。

この光景を俺は知っている。

あの頃、ここで、何度も経験した。

身動きが取れないジェイルの目に、上下するプラカードのひとつが飛び込んできた。

王政を復古せよ

膝の裏を蹴られたような気分だった。

「ああっ!？」

チセが素っ頓狂な声をあげた。それを合図に、ジェイルの強張りがほどける。

「なんだ、いきなり？」

「あの人！ ほら、あの黒いポロシャツの人です！」

シユプレヒコールと一緒に腕を突き上げている、若い男をチセは指差した。

「私のパスポート盗んだ人です」

「まさか……。似ているだけだろう」

チセはぶんぶんと首を横に振った。

「私、目がいいんです。間違いないです。あの人左手にしてる水晶のブレスレット、私のです。というか、正確には母のです」

「どういうことだ？」

「パスポートと一緒にポーチに入れてたんです。いつも持ち歩いているお守り代わりというか、母の形見だったので」

ジェイルは目を見開いた。

「そんな大事なこと、なんではやく言わないんだよ!？」

「盗られたのは私の責任だし、あのと追いかけても捕まらなかったから、そういう運命なのかなと思って……」

チセは息を吸った。

「でも、ここで出会ったってことは、取り戻せてことですね」

斜めかけバッグを肩から外すと、有無を言わずジェイルの腕に押し付けた。

「しばらく預かってもらえますか？ 行ってきます」

「待て、おい！」

ジェイルが静止するよりはやく、チセは駆けだしていた。周りの観光客が、大声を出したジェイルを何事かと見てくる。

「クソッ」

風体に似合わぬ水玉柄のバッグを掴んで、ジェイルも走り出した。

第11話：追え！

外階段を駆け下り、回廊式の通路を抜ける。

デモの様子をうかがう団体客たちが、出口の手前でもたついている。出口のすぐ先、宮殿前庭にはデモ隊の先頭がいた。

「ドルーダ首相は辞任せよ！」

「「そうだー！！」」

シユプレヒコールが止むことなく聞こえてくる。

「すみません、通してください」

騒々しさに負けないよう声を張り上げながら、ジェイルはでつぶりと太った中年女性の肩と肩をかきわけた。身体を斜めにして狭い空間を通り抜ける。すでに外に出ていたチセによろやく追いついた。「いきなり、走り出すなよ」

肺から息を吐き出すのと同時に、大きくため息をつく。チセは特に悪びれることなく、ちょこんと頭を下げた。

「みつかったか？」

「まだ。確か、このへんにいたと思うんですけど……」

息を整えたジェイルは、改めてデモの全景を見渡した。宮殿の前庭を覆うように、左右に長い列が広がっている。警官が集まってきたるものの、公有地という特性上、無闇にやめさせることもできず、出方をうかがっているようだ。邪魔が入らないのをいいことにデモ隊の勢いは増していた。

「汚職だらけの政党政治にはもうウンザリなんだよ！」

「ドルーダ、出てこいよ。ケツの穴が小せえ野郎め！」

下卑た野次が飛んだ。ゲラゲラと笑い声が響き、ジェイルは眉根を寄せる。行儀の悪い手合いもずいぶん混じっているようだ。だいたい今日は日曜だから、ドルーダは首相公邸にいるはずだ。それ以前に、議会や式典などの行事で今も宮殿が使われているとはいえ、政府の中枢は新しい官庁ビルに移されているのに。

そこまで考えたとき、ジェイルは動きを止めた。何か、妙だ。

この規模のデモが、自然発生的に起きるとは考えにくい。たとえば労働組合や政治団体など、普通は主導的存在ごとにある程度の特徴があるものだ。だが、参加者の顔ぶれを近くで見ると、不自然なほど印象がバラけている。いかつい中年男性もいれば、主婦っぽい女性もいる。今、野次を飛ばしたのは、デモ隊の端のほうに固まっている若者たちの集団だった。ジェイルの正直な感想としては、政治活動からはもっとも縁遠そうな、不良っぽい外見をしている。たとえば中央広場にたむろして、盗みを働くようなタイプの。

「あ！」

そのなかに、チセが指差した黒いポロシャツの男がいた。近くで見るとかなり若い。チセと同じ年くらいだろうか。

「どうする？」

ジェイルは右隣を見た。が、そこにいたはずのチセがいない。チセはすでに、デモ隊のほうへすたすたと歩き始めていた。そのまま、迷うことなく隊列の中に入ると、仲間と喋っていた男の肩をとんとんと叩いた。

男が振り返る。彼の左手首を指差して、チセはにっこりと笑って言った。

「Would you return my blacet?」

外国人の少女にいきなり英語で話しかけられ、男はきよとんとする。仲間が尋ねた。

「なんだ、この女。知り合いか？」

「いや、知らねえよ」

「可愛いじゃん。外国人がお前に何の用だよ」

「だから知らねえって」

男たちが、チセの頭から爪先までをじろじろと見回した。チセはにっこりとしたまま、はつきりと発音した。

「You stole my passport and blacet, don't you?」

パスポートという響きを聞いた途端、男が表情を曇らせる。

「I think this ballet is mine
…」

「ノー！ノー！」

チセが最後まで言い終わる前に、男は大袈裟にかぶりを振った。わかりやすい拒絶のジェスチャーで、チセを追い払おうとする。

ジェイルはその様子を少し離れた場所から見ていた。ただし、チセたちの話す声までは聞こえない。

「あいつ、何やってるんだよ……」

嫌な予感がして、おそろおそろデモ隊のほうに近づいた。そのとき、ちらりと振り返ったチセと目があった。

チセが口の端でにやりと笑った。

次の刹那、チセは男を指差しながら、大声で叫んだ。

「パスポート！ マイパスポート！！！！」

男たちがぎよっとする。近くにいたデモ参加者も、シュプレヒコールをやめてチセたちを見た。

「パスポート！！！！」

さらにチセは叫ぶ。ざわめきが、チセと男たちの周りを円のように取り囲む。

「やめろ！ノー！」

男が慌てて止めようとするが、チセは癪癪をおこした子どものように叫ぶのをやめない。騒ぎに乗じて、ジェイルはデモ隊の中に入り込む。人垣から顔をのぞかせたとき、後方からバタバタと走る足音が聞こえた。

「何の騒ぎだ！」

警備に当たっていた警官が、騒ぎを聞いて駆けつけてきたのだ。その姿を認めたチセは、ひととき大きな声で、男を指差し叫んだ。

「ヒー・ストール・マイ・パスポート！」

「このガキ、やめろって！」

男の仲間のひとりがチセを押しした。ぐらりと態勢を崩したチセは、

「キヤツ」という悲鳴をあげて、派手に地面へと転がった。

その場にいたすべての人間が固唾を飲む。静寂を打ち破るように、警官が怒鳴った。

「暴力行為だ！」

警官はチセを倒した男に駆け寄って、腕を取り押さえた。

「ほかの者も動くな！ デモをやめろ！」

デモに介入するタイミングを伺っていたほかの警官たちも、その言葉をきっかけに一斉に動き始めた。

「やべっ」

盗んだ張本人の男が、弾かれたように走り出した。

「お、おい！」

ジェイルは男の背中に向かって叫ぶ。男はチラリと一瞥すると、さらに走るスピードをあげた。

「逃げんな！ おい！」

反射的にジェイルも走り出した。男はジェイルをまくように、ざわついている参加者のあいだをくぐり抜けていく。スリに慣れているだけあつてか、逃げ足が速い。

「待て！」

人の波をかきわけながら、ジェイルは後を追った。広場はすでに、デモ隊と警察が入り乱れて、秩序を失っていた。その混乱のなか、男を追う目と、脚の動きだけに神経を集中して走る。

突如、ぐいと腕を後ろに引っ張られた。持っていたチセのバッグについているチャームが、すれ違った女性のリュックに引っかかっている。そのあいだにも男は先へ先へと逃げていく。

「ちょっと動かないください」

「ひっ!？」

サングラスのヒゲ男に背中をいじられ、女性は硬直していた。チャームと荷物のかばんが引っかかっている。こんなところで時間を食っている場合ではないというのに。

ガチャガチャと乱暴に取り外した。ダッシュしながら、バッグを

脇に抱え直す。

だが今度は、プラカードを掲げた参加者が、走ってくるジェイルに気づかず道をふさいでいた。

「すみません、通して！」

ほかの道を目で探すが、迂回する余裕はない。ぶつかりそうになった瞬間、腰を落とし、頭を引つ込めた。プラカードを後ろ髪がすすめる。

デモの一群を抜けた。男は広場の奥のほうへと逃げていく。ジェイルも後を追った。

人の群れから離れて大気に晒されると、途端に身体が軽くなったような気がした。背中汗でぐっちよりと濡れているが、不思議と疲れは感じない。強い力で芝生を蹴り続けた。神経の動きがどんどんクリアになり、世界と自分が切り離されたような感覚に陥る。

周囲にはもう誰もいない。男の背中が迫って来た。

ふたりは、緑深い敷地のはずれにまで辿りついていた。この先は行き止まりのはずだ。

ジェイルは拳に力を入れ、速度を高める。すると男は、敷地を区切る柵に足をかけた。柵を乗り越えて逃げるつもりのようなのだ。

「おい、待て！」

向こう側の車道に出られたら、獲り逃してしまう。だが、男はぐいぐいと柵を昇っていく。ジェイルの額に汗が流れた。

第12話：たったひとつの名前

このままでは、間に合わない。

ジェイルはハッと閃いた。チセのバッグを乱暴に開けると、“それ”をブルーメランのように、思いきり男に向かって投げた。

「ぐえ!？」

カコーン!と気持ちのいい音を立てて、男の後頭部に命中した。

男ははずみで手を離し、そのまま地上に落下した。

「まさか、飛び道具としての使い道があるとはな」

肩で息をしながら、ジェイルは男のそばに落ちた木彫りの面を拾う。チセが出店で買った例のおみやげは、重量、質感ともに、投げるのに最適だった。

額の汗を雑に拭くと、座りこんでいる男の前に仁王立ちした。

「手間、かけさせやがって……」

「す、すみません! マジで! 勘弁してください!」

怒りの表情の面を手にしたジェイルを見上げて、男が涙目でわめく。

「デモは言われて参加しただけなんです! 政治とかどうでもいいです。組織からカネが出るって話だったんで、軽いバイトのつもりで」

ジェイルのことを警察関係者と勘違いしているのだろうか。黙っ

て男の左腕を取ると、男は「ヒエツ」と情けない声を出した。

「昨日、あの女の子からパスポートを盗んだな?」

「後ろ姿しか見てないんで、憶えてなかったんですマジで。すぐ業者に流したんで、パスポートはもう手元にないっす」

「これは?」

ブレスレットを引っ張ると、男はさらに涙目になった。

「パスポートと一緒に入ってたんすよ。今こういうデザイン流行ってるじゃないすか。高そうな石使ってるし、気に入ったんで」

「返してもらっ」

ブレスレットは男の手首を離れて宙を舞うと、ジェイルの手に中に収まった。

「行け」

「は、はいっ」

慌ただしく立ち上がった、男は小走りに去って行った。それを見届けると、ジェイルはどさっと地面にしゃがみこんだ。

「……疲れた」

柵に背をもたれかけたつもりだったが、上半身がずるりと横向きにすべり落ちた。手足の力が抜けた。

「本気で疲れた……」

地面に寝転がって、力なくつぶやく。走っている間は気にならなかった疲れが、どっと押し寄せていた。

服が土で汚れるなど思ったが、すでに汗だくなのだからどうでもいいかと、ジェイルは考えを改める。デモの騒ぎがぼんやり遠くで聞こえる。自分の呼吸の音が、それを上書きする。一步も動きたくなかった。

緩慢な動作でサングラスを外した。代わりに木彫りの面を顔にかぶせて、瞼を閉じる。このあたりまで誰か来るとは考えづらいが、もし来たとしても、この姿で寝転がっていれば避けるだろう。

働きすぎた肺が胸を大きく上下させる。ジェイルはじっと、先ほどの男の言葉を反芻していた。

“言われて参加した” “組織からカネが出る” とは、どういう意味だったのか。

そのとき、こちらに向かってくる軽快な足音が聞こえてきた。

「あー、やっとみつけた。こんな奥まで行ってたんですね」

能天気な声が頭上に降ってくる。

「ふふ、お面似合ってますよ。気に入りました？」

見下ろされて、顔に影が差す。ジェイルはあえて目を閉じたまま、ぶっきらぼうに言った。

「何やらかしてるんだよ。お前のせいで、デモが大騒ぎになっただ

る

チセはジェイルの左横に体育座りしながら答えた。

「一応、最初は正攻法で返却をお願いしようと思ったんですよ。でもダメだったので、人の手を借りるしかないなと思って、あえて大袈裟に騒いでみました。ただ、転んだのはやりすぎだったかもしれないですね」

上半身を起こして、ジェイルはチセを見る。

「信じられん。わざと転んだのか」

「外国人ともめ事を起こせば、警察も黙ってないかなって。パスポートを盗んだこと自体は現行犯じゃないから、別のきっかけで介入してもらう必要があるでしょう。ちなみに、わざと手を出させるっていうのは、日本の公安がデモの取り締まりでよくやる手です」

ニコニコしながら物騒なことを話すチセを見ると、文句を言う気力も失われていく。

「事前に打ち合わせくらいしろよ」

「すみません。考えるより先に行動してた、というのが正しいところですよ」

チセは肩をすくめた。

「でも、転んだせいで人垣ができちゃって、あの場で男を捕まえられなかったのは誤算でした。結局逃がしてしまって、作戦失敗ですね。ごめんなさい」

「失敗じゃねえよ」

ジェイルはズボンの右ポケットからブレスレットを取り出した。

「ほら。パスポートはなかったけど」

投げたブレスレットを、チセがキャッチする。

「……さすがに、無理かと思ってました」

「伊達に5年間毎日走っているわけじゃない。まあ、最終的にはこの面を投げて捕まえたんだが。魔除けの効力っていうのも、案外ホントかもな」

疲れているのを見せつけるのも恩着せがましい気がして、あえて

大したことないような言い方をしてしまう。

「やさしいんですね」

「別に」

照れ隠しに、そっぽを向いたまま顔を顔に当てた。しかし左側から伸びたチセの手に、面がはがされる。

「なにす」

「やさしいです、すごく」

細めた目に光を反射させながら、チセはジェイルの視線を捉えた。頬がほんのりと色づき、やわらかく口角をあげた笑みは、出会ってからはじめて見せる表情だった。

「うれしいです。本当にありがとうございました」

そう言ってチセは深々と頭を下げた。

打ち切るようにジェイルは立ち上がり、服についた土を払った。

「……面倒に巻き込まれる前に、はやく行くぞ。まっすぐ進めば宮殿の裏門に出るはずだ」

「はい」

ポケットに手を突っ込んで、ジェイルはずんずんと歩き始める。チセが軽やかな足取りでついていく。夕陽がふたりを照らし始めていた。

「これは驚いたね」

ヴェイラ随一の高級ホテルのスイートルーム。ユナル・ジャネイラは革張りのソファにゆったりと腰掛けながら、部下からあげられた調査レポートをめくっていた。

傍に控えた部下が慇懃に説明する。

「デモが中断した大元の原因は、参加者と日本人の少女とのトラブルでした。外国人ですし、偶発的なトラブルだと思っただのですが、たまたま私が近くにおりましたので、念のため追跡しました」

「すると、彼と合流したということだね」

調査レポートには、ジェイルとチセを隠し撮りした写真がプリン

トされていた。

「まず、マフィア関係を疑いました。ですが近くで声を聞いて、驚きました。日本語とヴェイラ語を流暢に使い分けていましたし、なにより、声がその……“陛下”そのものでしたので」

「君は長く宮殿に仕えていたからね。15年ぶりでも、雇い主の声はすぐに聞き分けられるだろう」

カルティエのライターを鳴らして、ユナルは煙草に火をつける。ゆっくりためを効かせてから鼻から吐き出すと、紫煙が立ちあがった。

「住居は旧市街の中心部にあるアパートです。すぐに大家にカネを掴ませて確認したところ、名前はジェイル・ジャネイラだと」

「母方の名前を使っているのか。そりゃ、本名を名乗れば大騒ぎになるだろうからね。ジェイル・レックス・ハツサ・チュンクリットという名前は、世界中を探してもひとりしかいない」

ユナルは立ち上がって、窓から夜景を眺める。西の丘に、ライトアップされた宮殿が見えた。

「デモも中断したとはいえ、写真は充分撮れたようだし、朝刊は問題なく作れそうだと、さつき記者から電話があつたよ。さらに彼の所在をみつけれられたとなると、予想以上の収穫だね」

口元をにやりとさせながら、己の立派な髭を指先でなぞった。

「計画が、一気に進むかもしれないな」

第13話：招かれざる客

ジェイルは居間のカーテンを勢いよく開いた。まぶしい光が室内に飛び込んでくる。ついでに窓を開けて空気を入れ替える。屋台で売り買いする声や、犬や鳥の鳴き声といった、動き始めた街の音が聞こえる。

「完璧な月曜日だ」

息を吸い、吐き、ジェイルは満足げに頷いた。

「さあ、今日こそ出ていけよ！」

そして振り返ると、勢いよくチセを指差した。

チセはダイニングチェアに行儀悪く体操座りして、表の屋台で買ってきた揚げパンをもぐもぐと頬張りながら、朝刊をめくっていた。

「すごい、一面ですね。昨日のデモ」

「俺の話、聞いているか？」

「聞いてますよ」。大使館に行つてパスポート再発行の手続きをします。もう、何回も言わなくてもわかつてますってば」

ジェイルの意気込みなど気にもかけない様子で、チセは興味深そうに新聞を見ている。その悠々とした姿に、どちらがこの家の主人なのか一瞬わからなくなりそうだった。だが、ジェイルは気を取り直して続ける。

「9時から俺の仕事の時間だ。あと15分。それまでに荷物まとめろよ。そしてもう戻ってくるな」

「昨晚のうちに準備してます。もう、ほんと最後の夜だからいっぱい聞きたいことあったのに、はやく寝ちゃうからヒマでヒマで」

昨日は宮殿から戻ったあと、シャワーで汗と汚れを洗い流したら、あつという間に眠気が押し寄せてきたのだった。再度外出して、近所の中華料理屋で軽い夕食を済ませるところまではなんとか起きていたが、帰宅するなりリクライニングチェアに沈み込んでしまった。おかげで今朝はすっきりとした目覚めを得ることができたのだが、

子どものように眠ってしまったのは少し恥ずかしい。

「あれだけの追跡劇を繰り広げりゃ、誰だって眠くなるんだよ」

さらに言えば、お前が来てから生活リズムが狂わされていたのだ、
と思ったが、悔しいので口には出さない。

「まあ、意外と可愛い寝顔の写真が撮れたから、いいですけどね」

「はあ!？」

「冗談ですよ。ジャパニーズジョークです」

チセは敵意のない顔で笑ったが、冗談かどうか疑わしいものだ。

ジェイルはそれ以上詰めるのを諦め、チセの向かい側に腰掛けた。

テレビをつけると、ニュース番組がちょうど昨日のデモの様子を映
していた。

「千人以上の民衆がデモに集まり、ドルーダ首相退陣を求め、観光
客でにぎわう宮殿前は一時騒然となりました。途中で一部の参加者
と警官がもみ合う騒ぎがあり……」

アナウンサーの言葉に一瞬身を固くするが、ジェイルやチセの姿
は映されることはなかった。ほっとするが、画面の端に見えた王
政を復古せよ というプラカードの文字は、胃のあたりに嫌なうず
きを感じさせた。

ニュース番組が終わり、テレビ画面の時刻表示が9：00に切り
替わる。

「9時だ」

チセが奥の部屋から大きなリュックを引っ張り出してきた。背負
って、ペこりと一礼する。

「いろいろ、お世話になりました。ありがとうございます」

「まっただ」

「でも楽しかったですね」

「どこが」

まだ喋りたそうにしているチセを、ジェイルは玄関へと追いやる。
「もう、会うのはこれきりだ。面倒に巻き込まれるのはご免だから
な。安いホテルには泊まるなよ。観光地ではスリに気をつける。水

道水は飲むな。で、親を心配させないうちに日本に帰れ」

言いたいことを一気に言い切ると、チセがおかしそうに笑った。

「なんだか、お父さんみたい」

「俺はまだ32歳だ」

「褒めてるんです。その、なんだかんだ世話好きのところ、私、好きですよ」

最後の言葉に、耳を疑った。思わずチセの顔を見る。人を小馬鹿にした表情を浮かべていると思ったチセは、意外にも静かに目を細めてジェイルの顔を見上げていた。

「じゃー！」

しかし、すぐにいつもの笑顔に戻ると、ジェイルが声をかける間もなく、あっという間に玄関ドアの向こうに去っていった。ギイと音を立てて、ドアが閉まる。蓋をされたように、部屋に静けさが戻った。

ジェイルは放心したように突っ立っていた。

「いつたい、なんなんだあいつは……」

我に返り、ドアチェーンをかけようと手を伸ばす。だがいきなり、再度ドアが開けられ、ジェイルはバランスを崩した。ドアの向こうには、こちらを窺うように見ているチセがいる。

「だから、なんなんだお前は！」

唾を飛ばすジェイルに、珍しくチセは神妙な顔で言った。

「えーと、お客さん？みたいですよ」

チセの後ろに、スーツ姿の男がふたり立っていた。路地裏のアパートにはおよそふさわしくない2人組だった。

防衛本能を感じてジェイルは身構える。

「……電気もガスも、料金はちゃんと払っているはずだが」

強い口調で言い放ったが、男たちは微動だにしない。嫌な予感がした。

「へえ、君、自分で電気代なんて払っているのかい」

そのとき男たちの後ろから、別の影が現れた。

「仮にも一国の元首だった人間とは思えないな」

その姿を認めた瞬間、ジェイルは反射的にドアノブを引いた。だが、それより早くスーツの足が突っ込まれる。なす術なくドアが開かれるのを見ながら、もはや事態はどうにもならないことをジェイルは自覚した。天を仰ぐ。5年間逃げおおせてきたのに、こんなところでチエック・メイトか。

「久しぶりの再会だというのに、ずいぶんな扱いじゃないか、ジェイル」

折り目正しいタキシードに身を包み、鼻の下に立派な髭を携えた男は、からかうように口の端をあげた。

「お元気そうで……叔父上」

母親の弟であるユナル・ジャネイラを、ジェイルは前髪の間から覗んだ。

「シンガポールにいらっしやると思っていましたから、人違いかと思っただけを」

「招待状を何度も送っただろう？ 今日王太后の80歳の誕生日だから、盛大なパーティーを開くと。いつまで経っても返事がないから、家まで迎えに来たというわけさ」

「この住所は、教えていないはずですが」

「昨日は驚いたよ。まさか君を宮殿で見かけるとは思わなかったから」

ジェイルは内心で舌打ちする。いったいどこで見られ、尾けられていたのか。この叔父の抜け目なさを過小評価していた。

「このお嬢さんと観光かい？」

ユナルは横に立っていたチセの顔を覗き込む。

「コンニチハ」

「こ、こんにちは」

ヴェイラ語の会話の内容はわからないだろうが、緊迫した状況はチセにも伝わっているようだった。ジェイルに向き直り、ユナルは

愉快そうに笑った。

「可愛いお嬢さんだねえ。君にロリータ・コンプレックスの気があるとは知らなかった」

「冗談はやめてください。彼女は立派な大学生です。日本の友人から預かっている大事な教え子だ」

笑えない冗談に、ジェルは無表情で答える。

「ヴェイラと日本のかけ橋か。いいねえ、彼女も今日のパーティーにぜひ招待したいな」

「彼女は関係ないでしょう！」

思わず声を張り上げたが、ユナルはものともしない。

「パーティーは人が多いほうがいいよ。王太后も喜ぶだろう」

「もう、『王太后』ではないでしょう。ただの老人だ。そっとしてあげてください」

「私にとつては永遠に王太后だよ。同じように彼女を慕う人たちがたくさんいる。集まって誕生日を祝うことが、そんなに悪いことかな？ 孫の君が顔を出せば、彼女もきつと喜ぶよ」

「……俺は、そうは思わない」

ユナルは興味深そうにジェルの全身を眺め、指先で髭をなぞった。

「俺なんて言うようになったかい。青白い文学少年だった王子様が」
返事をする代わりに、ジェルは目の前の叔父を睨んだ。

ユナルはパンパンと手を叩いた。

「さあ、パーティーは正午からだ。はやく準備しないと。まさか、そんな普段着で出席するつもりじゃないだろうね」

「心配されなくても、スーツくらいあります」

「この子はどうしようか？ ドレスは持っているかな」

「彼女は大使館に行く用事があるんです。それにもう日本に帰る予定だ。巻き込まないでください」

ユナルはにやりと目を細めた。

「じゃあ、大使館までお送りしよう。そのあと、ドレスアップさせ

て会場まで連れていくよ」

そう言って、チセの肩に手を置いた。止めようとしたジェイルを、スーツの男が押しとどめる。

なるほど、チセを人質に取るつもりか。どこまで調べたのか知らないが、昨日の今日で実に用意周到な男だ。だからジェイルはこの叔父が嫌いなのだ。

「監視のためにも彼らは置いていくよ。では、3時間後に」
連れて行かれるチセが、振り返って叫んだ。

「よくわかんないけど、私は大丈夫です！ たぶん」

おそらく、ユナルが外国人であるチセに手を出すことはないだろう。利害関係を冷静に判断し、使えるものを都合よく使う。それが叔父のやり口だ。

ユナルとチセの後ろ姿が、階段を降りて行った。車に乗り込む音がする。

ジェイルは男たちに向かって、静かに告げた。

「悪いが、家にはあげられない。俺を待つなら、外の車の中で待つてほしい。ここは普通のアパートだ。スーツの男ふたりがいると、悪目立ちするだろう」

彼らは顔を見合わせた。

「心配しなくても、逃げやしないさ。あの叔父が、絶対に逃がさないだろうしな」

ジェイルは部屋へと引き返した。

居間にかかっている時計は、9時15分を指していた。だが果てしなく長い時間が経ったような気がする。

ジェイルは壁に力なくもたれた。身体が自分のものではなくなつたようだった。

第14話：美男ですね

どのくらいそうしていただろうか。

壁にもたれて天井を見上げていた姿勢から、ジェイルは億劫そうに身体を起こした。前髪がぱらりと落ちて視界を邪魔する。浴室へ向かって部屋を横切りながら、シャツを脱いで無造作に椅子に引っかけろ。

洗面台の前に立つ。かがみこんで頭を蛇口の下に突っ込む。右手をひねると、勢いよく水が飛び出してきた。肌着のTシャツまで水が染み込んだが、構わなかった。

充分に水をかぶって、上半身を起こす。頭部から、水滴がぼたぼたと滴り落ちていた。グレーのTシャツが、水分を含んでまだらに濃くなっている。Tシャツの裾で、濡れた顔を雑に拭いた。目の前に鏡がある。ジェイルは鏡に映る男を睨んだ。

黒曜石のようにしっとりしたツヤの髪が、額に張り付いている。そのあいだから、切れ長の目が覗いていた。この国の人間にしては白い肌。その口元を、不精髭が覆っている。薄い筋肉のついた上半身はすわりとしているが、腹周りだけは32歳という年齢に抗えず、柔らかい部分が目立ち始めている。

これが、自分の身体だ。俺のものだった。　　ついさっきまでは、髪を伸ばしても、髭を伸ばしても、誰にも何も言われなかった。

その環境を自分で手にしてきたのだ。

だがそれはあくまで逃避行だった。追手にみつかった以上、もはや所有権は宙に晒されている。あっけないほどあっという間に。失うときはいつもそうだ。

「髭は……どうにもなんねえな」

誰に聞かせるでもなく呟いて、ジェイルは剃刀を手を取った。

リビングに戻り、必要最低限の仕事だけを済ませた。パソコンを

閉じると、今度はベッドルームのドアを開ける。しばらくチセに占領されていた部屋だ。一瞬だけ人の匂いがしたような気がしたが、それもすぐに消えた。

大して量の収められていないクローゼット。そのいちばん端にひっそりとかかっていた、クリーニングに出したきりの黒のスーツを取り出す。イギリス時代、仕立て屋の息子だった同級生に、冠婚葬祭に使えるからと言われてあつらえたものだ。最後に着たのはいつだったか。

アイロンをかけたばかりの白いシャツに腕を通す。小さなボタンをひとつ留めることに、呼吸の範囲が狭くなるようだ。いちばん上のボタンまで留めると、部屋の空気が変わった気がした。

ネクタイはあえてつけなかった。黒のネクタイだと自分では葬式のようになりそうだし、かといってピンクや水色のネクタイではしやぐ気にはなれない。蝶ネクタイなどもってのほかだ。うるさがたの年配者からはあれこれ言われるかもしれないが、このくらいは好きにしてもいいだろう。

上着を羽織って、鏡の前に立つ。

「……ハッ」

呆れた笑いのような、失望のため息のような、どちらともとれる乾いた声が漏れた。おそらく、どちらも本心だった。

身なりを変えただけで、15年間の時空が一気に消え去ったようだった。それとも、変わったと思いきや、こんでいたのは俺だけだったのか。

くるりと踵を返して、玄関へ向かう。やはり靴箱の奥にしまったきりだった革靴を取り出す。スニーカーに慣れた足には、重石をつけているように感じられた。

ジエイルは部屋を振り返る。居心地のいい我が家だったはずが、どこか他人行儀な静けさをまとっていた。もう二度と帰ってこれないような、そんな予感がした。

11時ちょうどだった。アパートの階段を降りたと同時に、黒塗

りのハイヤーがゆっくりと滑りこんできた。助手席から出てこようとした男を手で制して、ジェイルは後部座席のドアを開けた。乗り込んだジェイルの顔を見て、男たちの動きが一瞬止まる。だが次の瞬間、何事もなかったように車は走り出した。

窓越しに、住み慣れた町並みが流れていく。ジェイルの姿を隠してくれた、生命力の溢れる雑多な街。だが、もう同じように暮らすことはできなくなるだろう。

車の窓から街を眺める自分を、さらに斜め後ろから眺めている気分になった。身体と意識のあいだに見えない壁があるような。

昔から繰り返し考えていた。この身体は、いったい誰のものなのか。

少なくとも、今はもう自分だけのものではない。望むと望まないに関わらず、ジェイルがジェイル・レックス・ハッサ・チュンクリットである以上は。

ラーニア王太后は、ヴェイラ第7代国王ハデイト1世の妻であり、ジェイルの祖母である女性だった。

ハデイト1世の治世は、第二次世界大戦前から1970年代までの永きにわたる。大戦中もヴェイラの独立を保ち、「インドシナの雄」と呼ばれた。夫とともに激動の時代を生き抜いたラーニアは、当時にしては珍しくヨーロッパへの留学経験がある先進的な女性だった。美しく理知的で、夫を支える理想的な妻として、国民的な人気を誇った。ハデイト1世が亡くなり、ラーニアが王妃から王太后となっても、その人気は衰えなかった。王制が崩壊したとき、王族とその関係者は多くの権利を失ったが、ラーニア王太后に対してだけは特別措置がとられたほどだ。

車は首都のやや北に位置する「水晶宮」に向かっている。生前のハデイト1世が贈ったこの別宅に、ラーニア王太后は暮らしていた。「あなたはチュンクリット家らしい顔立ちをしていますよ。よい王様になれそうね」

祖母はそう言って孫のジェイルを可愛がったものだ。ジェイルはやくからスイスの寄宿学校に入ることの後押ししたのも彼女だった。

とはいえ、子どもらしく甘えた記憶はあまりない。常に背筋が伸びていて、はつきりと物を言う祖母は、どちらかという緊張する相手だった。というより、ジェイルの父や母もそうだったのだ。ラニア王太后は、王家において特別な影響力を持っていた。

車が門をくぐる。建物のポーチ部分で静かに止まった。「水晶宮」という名にふさわしく、色とりどりのタイルが敷き詰められた玄関に降り立つ。待ちかまえていたように、守衛が扉を開く。

「やあ、待っていたよ」

バンケットルームの入口で客人の相手をしていたユナルが目を細めた。一方、客のほうはジェイルを見て目を丸くしている。

「本当に来るか、不安だったんだけどね」

「人質を取られたんじゃないよ、来ないわけにはいかないでしょう」

「物騒なことを言うもんじゃないよ。ほら、お連れ様はあちらだ」

ジェイルが壁際に目をやると、数人に囲まれて話しかけられているチセがいた。

チセは、ヴェイラの伝統衣装を現代風にアレンジしたようなデザインのドレスを着ていた。ヴェイラシルクの生地は光沢のあるピクオレンジで、襟元と裾部分に金糸の刺繍がほどこされている。刺繍にあわせて、靴はゴールドのストラップパンプス。ノースリーブの上半身に、膝がちらりと見える丈のコンパクトなシルエツトは、背が低いチセによく似合っていた。

「I'm 21 years old. え、中学生に見える？ ほんとですってば！」

珍しい日本人の少女は、客人のいいおもちゃになっているようだ。人のあいだを抜けて、チセのほうへ進んだ。ジェイルの顔を見た誰かが息を呑む気配がする。

チセがジェイルに気づいた。真ん丸の目が、さらに見開かれた。

チセを囲んでいた人びとが、さつと散らばった。

「ユナル叔父に、何もされなかつたか」

「いえ、すごく紳士的でしたよ。ドレス可愛いし、ジュースおごってくれたし……」

「パスポートの手続きは？」

「それは、大丈夫です。数日で新しいものが発行されるって」

チセがジェイルの顔をまじまじとみつめる。

「なんだよ」

「ヒゲ……」

ジェイルは顎に手をやった。

「不精髭で来るわけにはいかないだろう」

ただでさえスースーするのに、見られると居心地が悪い。だが、チセはさらにジェイルの顔を凝視した。

そして、いきなり爆笑した。

「あはははは！ もー、びつくりした。さっきまでヒゲだったのに、突然なくなってるから、わかんなくなつた。ていうか、イケメンですわね！」

「イケメン？」

「格好いいって意味ですよ！ ヒゲがないと、一気に若返るといっか、好青年風ですね。スーツもシックで似合ってます。まあ、個人的にはチンピラファッションも好きですけど」

チセはケラケラと笑っている。うるせえよと呟いて顔をそらしながら、ジェイルは少しだけ安堵していた。この空間で、昨日までの自分を知っている人間がひとりいる。

「皆さん、大変長らくお待たせしました。王太后の準備ができたようです」

ユナルのバリトンボイスが響いた。中央の立食カウンターに料理が運び込まれ、ドリンクを載せたトレイを持って、ボーイが客のあいだを歩いていく。

「王太后を迎える前に、ひとつ大事なお知らせがあります。今日は

特別ゲストが来ています」

ユナルは壁際に立っているジェイルを見て、微笑んだ。

「王太后の孫であり、私の親愛なる甥である、チュンクリット王朝最後の国王・レックス2世陛下と、日本人の友人チセ・オビサワ嬢です」

どよめきが起き、部屋中の視線がジェイルに向けられる。ユナルは不敵な笑みを浮かべている。ジェイルはまっすぐ顔をあげて、ユナルを見つめ返した。

パーティーが始まるうとしていた。

第15話：乾杯

「では、王太后をお呼びしましょう」

ユナルの言葉に、ジェイルとチセを囲む津波のような視線とざわめきが、いったんおさまった。大広間前方の扉に注目が集まる。ズボンのポケットの中で、ジェイルは手を握りしめた。

ユナル自ら恭しく扉を開く。40〜50人はいるだろうか、集まった大勢の客人たちが一斉に拍手する。

紫のロングドレスにカーディガンを羽織ったラーニア王太后が、ゆっくりと現れた。

ジェイルは息を呑む。頭はすっかり白髪になり、少し小さくなったようには感じるものの、背筋はすっと伸びている。穏やかにあがった口角が、優雅さを醸し出していた。

「まあまあ……」

会場中を見渡したあと、ラーニア王太后は口を開いた。

「私のようなおばあさんのために、こんなにたくさんの方に集まっていたら、嬉しいわ」

王族にとつて、人前で喋るのも仕事のひとつだからだろうか、80歳になるというのに声のハリも変わっていない。

「それとも月曜日だから、皆さん仕事をサボるための口実としていらっやっただのかしら」

ドツと笑い声があがる。機知に富んだ語り口も相変わらずだった。ジェイルは心の中で唸る。さすがは、ラーニア王太后だ。

大広間の上座に準備されたテーブルと椅子へと、ラーニア王太后が誘導される。

「ごめんなさい、脚が少し悪いものだから、座らせていただきます。どうぞ、飲み物もお料理もどんどん召しあがってくださいな。楽しい時間を過ごしましょう」

「では、皆さん、乾杯いたしましょう」

ユナルがラーニアの傍に立ち、杯をあげる。皆もそれに倣った。
「我らがラーニア様の健康と誉れに、乾杯！」

「まさか今日陛下にお目にかかれるとは。いつヴェイラに戻られた
ので？」

「オックスフォードでは優秀な成績だったとか。向こうでのお話を
聞かせてください」

「現在は、やはりユナル様のように投資を？ 今度新会社を立ち上
げるんですが、ぜひとも陛下に顧問になっていただければ……」

手にしたシャンパンに口をつける暇もなく、ジェイルは質問攻め
に遭っていた。ひとりが話しかければふたり加わり、ふたり加われ
ば3人が口を開くというふうに、人の壁はどんどん厚くなっていく。
「期待されているような話はありません」

ジェイルは適当に話を濁そうとするが、目を輝かせた客人たちは
それを許さない。

「あの陛下が、こんなに立派な男性になられて」

「ご結婚は？ もしよろしければ、うちの娘をご紹介したいもので
す」

「母君に似て美形でいらっしゃる。さぞかしイギリスでもおモテに
なられたのでは」

右手に黒いレースの扇子を持った夜会巻きの婦人が、「あ！」と
口に手をあてる。

「もしかして陛下のお相手は、あの方……」

そこにいる人間の視線が、立食カウンターの前にいるチセの背中
に注がれる。チセはにこにこしながら、ブラックタイガーの塩茹で
や、鶏の香草蒸しを物色していた。

「違います」

ジェイルはうんざりした表情で言った。

「彼女はオックスフォードの友人の教え子で、たまたま現在預かっ
ているだけです」

これだ。年寄りはずぐに結婚だの子供だの言いたがる。ジェイルは話の流れを断ち切ろうと、口を開いた。

「だいたい、私はもう王ではないですから、“陛下”と呼ぶのは間違ってます……」

「皆さんご存じのとおり、甥っ子はなかなかのカタブツでね」

後ろから、ユナルがジェイルの肩に腕を乗せた。ジェイルは身をよじるが、ユナルにがちりと挟まれていて、逃げられない。

「憶えていますか？ 16歳になったカヤナ様の成人の儀」

ユナルは、ジェイルの姉の名前を口にした。

「もちろん憶えていますわ。私も出席しましたもの。とても豪華なパーティーで」

「そうそう、大人の正装をしてお化粧されたカヤナ様に、ジェイル様が恥ずかしがって、晩餐会中ほとんど口をきかれなかったんです」

「国王陛下と妃殿下が苦笑いされていましたな。もう20年も前のこととは。ああ、いい時代でした」

あつという間に、彼らは思い出話に花を咲かせ始めた。ジェイルへの関心が途切れた隙を見て、ユナルがジェイルの肩に腕をかけた態勢のまま、身体を壁際に回転させる。ジェイルの耳元でささやいた。

「スペシャルゲスト陛下、もっと愛想良くしたらどうだい。ずっと海外にいた国王が、久しぶりに姿を現したんだから」

「だから、俺はもう国王ではないし、陛下でもありません」

ジェイルはユナルの腕を振り払い、小声だが強い口調で言った。
「素っ気ないことを言うなよ。ここにいる人たちは、みんな君のことが大好きなんだ」

「彼らが好きなのは、俺ではなく王家でしょう」

「私も含め、王族関係者はほとんど国外に散らばっているからね。みんな、こうして昔を懐かしむ機会に飢えているのさ。そうそう、こないだアメリカで姉上に会ったよ」

ジェイルはユナルの笑みを見つめた。ジェイルの母は、王制崩壊後、結婚した長女のカヤナとともにサンフランシスコに移住していた。

「カヤナの夫と子ども2人と、5人で平和に暮らしていたよ。カヤナの夫の事業もそこそこ順調みたいだしね。それにしても、元王妃にしちゃ質素な暮らしだけど」

「……そうですか」

ジェイルは小さく息を吐いた。もう何年も、母にも姉妹にも会っていない。

「ついでに、君の妹のダニットはシドニーで暮らしてるよ。華僑の夫とのあいだに、もうすぐ子どもが生まれるそうだ」

「ずいぶん詳しいですね」

ジェイルが言うと、ユナルは鼻で笑った。

「家長のくせに、君が知らなさすぎるんだよ。ヴェイラから海外に移住した我々は、頼れるものがないのだから、一族の繋がりを大事にするしかないだろう？ まさにディアスポラ、流浪の民さ」

「だからって、お祖母様の代理人みたいなことまでするんですか」

特に近い間柄というわけでもないのに」

「孫の君に比べれば、ね。だが、うちの家系はラーニア様の遠縁筋だから、それほど不自然なことでもない」

それに、とユナルは続ける。

「君が言うようにラーニア様がただの老人だとしたら、それこそお世話をする人間が必要だ。夫も息子も亡くした上、血縁者たちは国外に移住してしまい、孤独な生活を強いられている。孫息子にいたっては、ヴェイラに戻ったくせに所在を隠す始末だ。だから、代わりに私が近親者としての仕事をしているだけのこと。本来ならば、孫が祖母の面倒をみるのが筋のはずだけどね。違うかな？」

ユナルは、広間の上座で客と談笑しているラーニアを見た。

「君が来たことはまだ知らせていないんだ。挨拶する客の波が引けたら、チセ嬢と一緒に紹介するよ。それまでパーティーを楽しむと

いい。じゃあ、あとでね」

軽快な足取りでユナルは人の波に消えていく。

ジェイルは言い返せなかった。

「あのー、何か食べます?」

振り返ると、料理がいつぱいに載った皿を手にしたチセがいた。

「揚げ春巻きがめちやくちや美味しいですよ。アサリの炒めものもかなりイケます」

ジェイルはシャンパンをくいっと飲み干した。

「食欲はない」

「また、すぐそういうことを言う。こういう場では、ちゃんと美味しく料理をいただくのが大人のマナーですよ」

大人のマナーという響きに、ジェイルはハツとする。10歳以上年下の女の子にまで、そう言われてしまう自分が情けない。ユナルの言動は腹の立つことばかりだが、大人としての義務を果たしていないことは、確かに事実だった。

「……そうだな」

「あ、珍しく素直ですね。ヒゲがないから?」

「バカ、関係あるか」

チセは串に刺さった白身魚のフライを手に取り、ジェイルの眼前に差し出した。

「これなんかも美味しいですよ」

フライにかけられたチリソースが、ジェイルの鼻先でとろりと垂れる。甘酸っぱく、香ばしい匂いがした。だが唾を飲み込んだジェイルの目の前で、チセが手を翻す。ジェイルが「あっ」と叫ぶあいだに、フライはチセの口内におさまってしまった。

「何するんだよ」

「こうされると、食べたい気持ちになりませんか?」

幸せそうに咀嚼しながら、チセはウインクしてみせた。同時に、ジェイルの腹がぎゅうと鳴る。

「……確かにな」

ジェイルは苦笑して、新しいフォークを手に取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5824s/>

アフターキング

2011年12月8日04時55分発行